

伏見城跡・桃陵遺跡

—京町 1 丁目—

2017

有限会社 京都平安文化財



金箔瓦



調査地遠景（北西より調査地を望む）

例 言

1. 本書は、京都市伏見区京町1丁目245における事業所社屋建設に伴う発掘調査報告書である。

[文化財保護課受付番号 14F282]

2. 本調査は、株式会社ラプラス・システム（代表取締役社長 堀井雅行）の委託により、有限会社京都平安文化財が実施した。
3. 発掘調査面積は、138㎡である。
4. 発掘調査は、平成27年(2015)11月2日から12月18日まで実施した。整理作業は、平成27年(2015)12月21日から平成28年3月18日まで実施した。
5. 発掘調査および報告書作成にあたっては、以下の体制で行った。

指 導 機 関 京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課

調査検証委員 京都外国語大学教授 南 博史

同志社女子大学教授 山田 邦和

調 査 主 体 有限会社京都平安文化財（取締役 栗田尚典）

調 査 主 任 植山 茂

調査補助員 入江 正則

作 業 員 佐々木 元、長谷坂 一、村上 良広、大槻 淳、菅野 慎一
桑波田 明、矢野 匠人、税田 脩介

測量・図化 浅川 永子、小林 雅幸、田中 侑

遺 物 実 測 木建 梓

なお、調査中は随時小森俊寛（京都平安文化財顧問）の助力を得た。

6. 遺構には、概ね検出・確認した順に番号を付し、適時遺構の種類名を添えている。
7. 挿図・図版掲載の遺物は、個体別に通し番号とした。
8. 図版12・13の古地図写真は神戸市立博物館と御香宮神社から提供を受けた。
9. 本書の編集・執筆は植山が担当した。

凡 例

1. 調査に使用した座標値は、世界測地系（国土座標第Ⅵ系）に基づいている。水準点は T.P. 値（東京湾平均海面値）を使用した。
2. 使用した地図は京都市都市計画局発行の 1：2500 を参考にし編集した。
3. 色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄、1994）を使用した。
4. 遺構図は各図にスケールを掲載し、原則として縮尺を 50・100 分の 1 とした。
5. 遺構平面図の網掛けは現代の掘削部分であることを示す。
6. 遺物実測図は各図スケールを掲載し、原則として縮尺を 4 分の 1 とした。
7. 遺物番号は通し番号を付加した。実測図・写真図版共に一致している。



本文目次

例 言

はじめに	1
第 1 章 調査地の歴史的環境	2
第 2 章 調査の経過	9
1. 調査の経過	9
2. 調査日誌抄	12
第 3 章 基本層序	15
第 4 章 検出遺構	16
1. 遺構の概要	16
2. 石 列	16
3. 礎石列	19
4. 土 坑	19
5. 整地層	21
6. 落ち込み（京町通東側堀北端）	22
第 5 章 出土遺物	25
1. 遺物の概要	25
2. 土坑出土遺物	25
3. その他の出土遺物	31
第 6 章 調査の成果	33
1. 遺構について	33
2. 遺物について	35

報告書抄録

挿図目次

第1図	調査地位置図	1	第16図	遺構45 石材実測図	24
第2図	調査地周辺の遺跡と既調査地点	6	第17図	遺構40 出土遺物実測図1	25
第3図	検出遺構平面図1	10	第18図	遺構40 出土遺物実測図2	26
第4図	検出遺構平面図2	12	第19図	遺構40 出土遺物実測図3	27
第5図	調査風景	13	第20図	遺構42、49 出土遺物実測図	28
第6図	調査区南壁土層断面図	15	第21図	遺構9 出土遺物実測図1	29
第7図	石列1、2 平面・立面図	16	第22図	遺構9 出土遺物実測図2	29
第8図	石列3 平面・立面図	17	第23図	遺構9 出土遺物実測図3	30
第9図	礎石列平面・断面図	18	第24図	遺構29 出土遺物実測図	30
第10図	遺構40 平面・断面図	19	第25図	遺構35 出土遺物実測図	30
第11図	遺構9 平面・断面図	20	第26図	遺構6 出土遺物実測図	31
第12図	遺構6、28 平面・断面図	20	第27図	その他の遺構、包含層出土遺物実測図1	32
第13図	北半部整地層土層断面図	21	第28図	その他の遺構、包含層出土遺物実測図2	32
第14図	検出遺構平面図3	22	第29図	試掘調査結果と今回の調査区	33
第15図	調査区南西部遺構検出状態	23	第30図	現存町家の縁石	34

表目次

第1表	調査地周辺の既調査地点一覧	7	第2表	検出遺構一覧	11
-----	---------------	---	-----	--------	----

図版目次

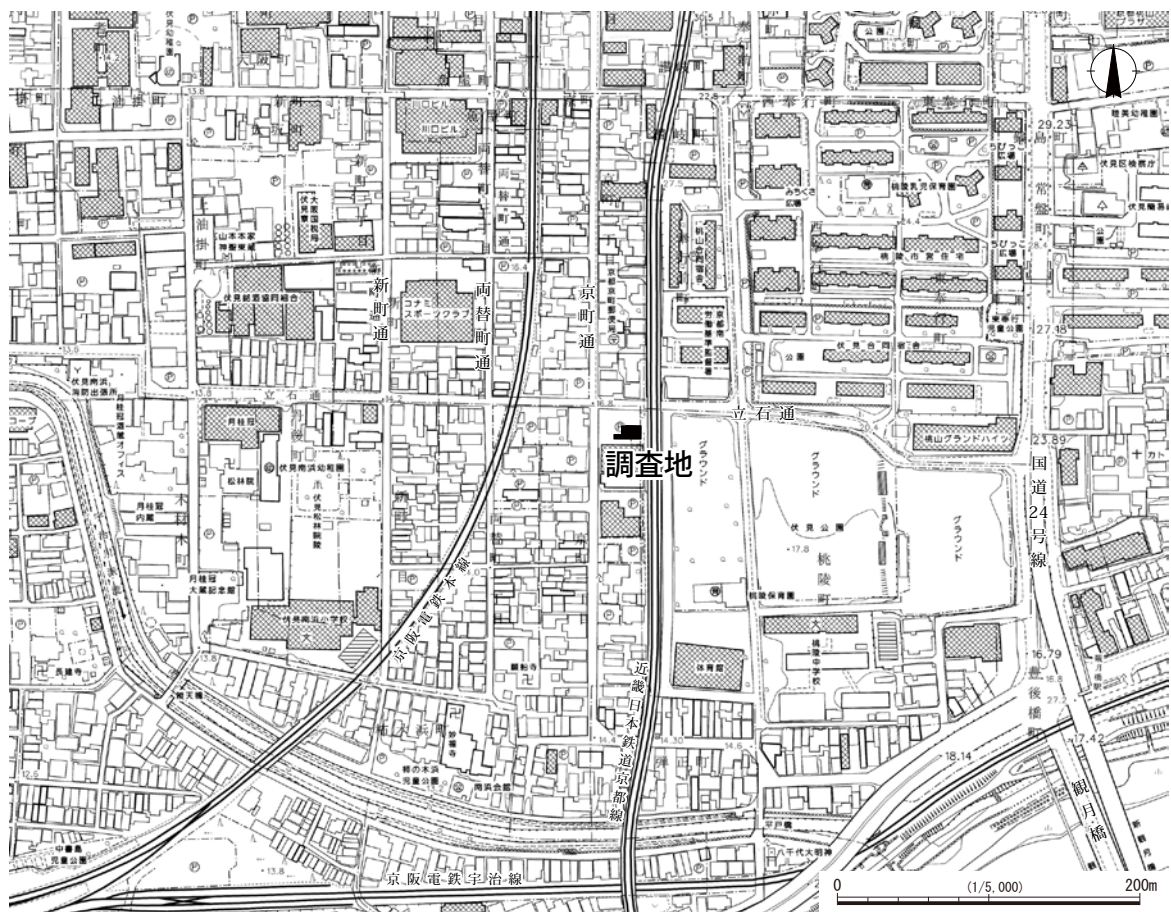
巻頭図版	金箔瓦／調査地遠景（北西より調査地を望む）
図版 1	調査地付近の環境 1：調査地遠景（北西より調査地を望む） 2：調査地周辺（調査地より北西を望む）
図版 2	調査前の状況 1：調査前全景（北東より） 2：調査地内の段差（北より）
図版 3	検出遺構 1 1：第 1 面 西寄りの状況（南より） 2：第 1 面 東寄りの状況（南より）
図版 4	検出遺構 2 1：第 1 面 遺構全景（東より） 2：第 1 面 西端部の状況（西より）
図版 5	検出遺構 3 1：石列 1 西端部（北より） 2：同石材撤去後 3：石列 3（西より） 4：同石材撤去後（南より） 5：遺構 28（東より） 6：遺構 6（東より） 7：遺構 16（北西より） 8：石列 1 下層の状況（南より）
図版 6	検出遺構 4 1：第 2 面 遺構全景（南より） 2：第 2 面 西端部（南より）
図版 7	検出遺構 5 1：石列 3 石材撤去後の状況（南より） 2：遺構 41 礎石抜跡（北より） 3：遺構 55 礎石（南より） 4：同礎石撤去後（南より） 5：遺構 58 礎石（南より） 6：同礎石撤去後（南より） 7：遺構 57 礎石（南より） 8：同礎石撤去後（南より）
図版 8	検出遺構 6 1：石列 2 石材撤去後の状況（南より） 2：遺構 58 礎石と南端拡張部 3：遺構 59 礎石（北より） 4：同礎石撤去後（北より） 5：完掘状況全景（南より）
図版 9	検出遺構 7 1：遺構 16 暗渠状遺構東端部（北より） 2：遺構 16 暗渠状遺構（北西より）
図版 10	検出遺構 8 1：遺構 16 暗渠状遺構礫撤去後（南より） 2：同（東より）
図版 11	検出遺構 9 1：遺構 69 落ち込み（南より） 2：同（東より）
図版 12	伏見桃山御殿御城之画図（神戸市立博物館蔵）
図版 13	伏見桃山御殿秀吉公御城并大小御屋鋪之図（御香宮神社蔵）
図版 14	出土遺物 1：土師器皿 2：染付磁器 3：陶磁類

はじめに

今回の調査地は、豊臣秀吉が天正20年（文禄元年：1592）に築き始めた伏見城の城下町の一角にあたる。伏見城の外堀で囲われた範囲は、桃山丘陵の南端部に築かれた壮大な城郭と、その西に広がる城下町からなる。また、弥生時代から室町時代にいたる複合遺跡である桃陵遺跡の範囲にもあたる。この度、遺跡地内に所在する事業所の社屋建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査を、京都市の文化財保護課の指導と事業主の協力を得て実施した。

調査地は、伏見城下町の南北の主要道路である京町通と、東西の立石通の交差点東南角である。また東側は近畿日本鉄道京都線の高架線路が通っている。調査地辺は、伏見城古図（図版12・13）では、「山口殿」あるいは「山口駿河守」と表記されている地点である。また、京町通に面した町家の街区のように表されている図もある。

1993年に実施された京都市埋蔵文化財調査センターによる調査区南側の事業所社屋の建設に先立つ試掘調査では、当初の京町通の路面と東側溝とみられる遺構などが検出されている（第29図）。今回の調査はこの成果を受けて、当該地の土地利用の歴史的変遷などを明らかにする目的で実施した。



第1図 調査地位置図

第 1 章 調査地の歴史的環境

調査地周辺の桃山丘陵南部では、縄文時代から人の生活が確認でき、貝塚とされる泰長老遺跡と縄文土器散布地の金森出雲遺跡が知られる。弥生時代では中期の方形周溝墓などが検出された桃陵遺跡がある。古墳時代には、桃山丘陵の東に 5 世紀代の全長 100m 級の前方後円墳、黄金塚 1 号墳・2 号墳が築かれた。現在 1 号墳は全壊、2 号墳は後円部の一部が残るだけである。丘陵西側斜面には古墳時代後期の桃山古墳群があり、桃陵遺跡にかかる地点でも古墳周濠の一部が検出され、埴輪が出土している（第 2 図・第 1 表 32）。

奈良時代前期にはこの地域にも寺院が建立される。御香宮神社境内では山田寺式・川原寺式軒丸瓦をはじめ、奈良時代前期～平安時代の瓦類が多数発見されている（御香宮廃寺）。また、現在の京都市立板橋小学校の場所でも奈良時代前期～平安時代の瓦類が出土しており、板橋廃寺とされる。なお、御香宮廃寺の場所に平安時代の弘仁 14 年（823）、御諸社（御香宮神社）が創設されたともいわれる。

『万葉集』巻第九に収められる柿本人麻呂の「宇治河作歌二首」に、「巨椋乃 入江響奈利 射目人乃 伏見何田井爾 雁渡良之」（-1699）の歌がある。このような巨椋池の水辺の風景を一望できるのが、桃山丘陵の南端で池の北岸に位置している現在の指月の地（伏見区桃山泰長老付近）である。この地は以来、眺望の優れた名所として知られていく。

平安時代 11 世紀半ばの治暦・延久年間（1065～1073）に、藤原頼通次男で伏見長者と称される橘俊綱が「伏見山荘」を営む。この山荘は風光明媚な指月の丘にあったと考えられている。俊綱は白河院の近臣で、修理職長官の修理太夫を長く勤めている。『今鏡』によると寛治 6 年（1092）頃、俊綱は白河院との会話のなかで名園として第一に石田殿、第二に高陽院、第三には白河院の鳥羽殿ではなく、眺望の点で自身の伏見山荘を挙げている。歌人でもある俊綱の伏見山荘（臥見亭）では、和歌のサロンが連日のように開かれたというが、この山荘は寛治 7 年（1093）に焼失した（『中右記』）。その後の再建の様子は不明だが、この地には寛治 8 年（1094）に臥見堂（伏見堂、伏見寺、即成院）も建立されるようである。同年俊綱は没し、俊綱没後の伏見山荘と所領は弟家綱が伝領し、さらに白河院に献上されて院の領となった。

伏見（指月）は景勝の地として知られていたが、『殿暦』の天仁 2 年（1109）条には「伏見津」の記述もあり、交通路の起点となる港もある程度整備されていたらしい。保延 2 年（1136）には、はじめ白河院の養子で、後に臣籍降下した源有仁が伏見山荘に移り住み、その後、有仁は養女の頼子（鳥羽院皇女）に伝領、さらに頼子はその領家職を平範家に与えた。

仁安 2 年（1167）、伏見山荘の地は後白河院の領となり、後白河院はここに伏見殿（上御所、伏見離宮）を造営する。しかし治承・寿永の源平の争乱のためか、後白河院が初めて伏見殿に行幸したのは平家滅亡後の文治 2 年（1186）のことであった（『玉葉』）。

鎌倉時代の建久 6 年（1195）になると、宣陽門院（後白河院の第 6 皇女）と高階栄子（宣陽門院母）

が即成院を再興し、嘉禄元年（1225）にも宣陽門院が伏見殿に御幸した記述がある（『名月記』）。伏見殿についてはその後も、建長7年（1255）に後嵯峨上皇の御幸があり（『百鍊抄』）、弘安元年（1278）には、後深草上皇が先に焼失した伏見殿を再建している（『勘仲記』）。以来、伏見殿は持明院統の仙洞となり、後嵯峨院と後深草院の行幸の記事もある（『増鏡』）。また後宇多天皇が、現在の柿木浜町あたりと想定される「伏見津」近くに、舟戸御所（下御所）を造営する。

南北朝期から室町時代にかけても伏見殿に関する記事が多く見受けられる。暦応2年（興国元年：1339）、広義門院（後伏見上皇の女御）が伏見殿の傍らに大光明寺を創建したという（1352年とも）。

康永元年（興国4年、1342）9月3日に伏見殿で伏見天皇の忌日の仏事が行われたが、参列の光厳上皇はその帰路で狼藉に遭った。南朝の京都進出後の文和元年（正平7年：1352）からは広義門院が伏見殿に住んでいる。延文元年（正平11年：1356）には宇治川の氾濫で舟戸御所が水没するという記事もある。延文2年（正平12年：1357）には、光厳上皇・崇光上皇・直仁親王（花園天皇皇子）が、軟禁されていた吉野の賀名生から戻り伏見殿に入る。

伏見殿に隣接する大光明寺では、春屋妙葩が貞治2年（正平18年：1363）に広義門院七回忌法要を行う。永和2年（天授2年：1376）、伏見殿小御所で光厳院十三回忌結縁灌頂が行われる。康暦2年（天授6年：1380）光明院の没後、大光明寺に遺骨が収められる。応永5年（1398）には崇光院が伏見殿で没し、大光明寺で葬儀が行われている。同年、直仁親王が没した後、足利義満は伏見殿を没収する。これは、義満が北山の西園寺山荘と同様の名園を手に入れようとしたらしいが、北山殿を山荘としたため、翌年には没収した伏見殿を伏見宮家に返却している（『椿葉記』）。返却された伏見殿には栄仁親王（崇光天皇第1皇子）が移るが、応永8年（1401）7月4日に伏見殿と大光明寺が焼失してしまう（『迎陽記』）。栄仁親王は嵯峨に移ったが、応永16年（1409）には伏見殿（宝厳院）の地に戻る。また、大光明寺の塔頭として大通院を建立する。応永23年（1416）11月、栄仁親王は伏見殿に没し大光明寺内に葬られ、以来、大光明寺が伏見宮家の菩提所となった。

栄仁親王の第1王子・治仁王が伏見宮を継いだが、翌年2月に治仁王は急死し、弟の貞成親王が家督を継ぐことになる。これに先立つ応永23年正月から、貞成親王の日記『看聞日記』の記述が始まる。『看聞日記』（～文安5年：1448）には、伏見殿での生活や世情の動向をはじめ、伏見地域の町や芸能・祭礼に関する記述も数多い。応永24年（1417）頃、連歌宗匠の承盛が伏見殿に出入りし、応永27年（1420）には伏見御所で茶会、応永から永享にかけては毎年伏見御所の常御所で七夕法楽花会が催されるなど、この当時の伏見殿は、足利将軍家の北山殿や後の東山殿と同様の文化的活動の中心となっていた。

貞成親王は事情により応永32年（1425）に伏見指月庵（大通院）で出家するが、第1王子の彦仁王が即位した（後花園天皇）ことから法皇と呼ばれることになった（後崇光院）。その後、永享7年（1435）に新しく伏見御所が造営される。この時期の伏見の状況は、光厳院古図の写しで文安2年（1445）成立とされる『伏見山離宮近廻地図大概』絵図の写しが幾本か伝わり、

ここには指月の丘の伏見殿と寺院をはじめ、いわゆる伏見九郷の集落の散在する様子が描かれている。康正2年(1456)、後崇光院伏見宮貞成親王は一条東洞院邸で没したが、墓所は伏見にある。

応仁元年(1467)から突入する応仁文明の乱では、伏見地域も大きな損害を受け大光明寺も荒廃したが、その後ある程度は復興されたようである(『蔭涼軒日録』)。乱後の文明10年(1478)には、後土御門天皇が荒廃した指月庵跡に般舟三昧院を創建した。文明13年(1481)には、宇治川に臨み木幡山を後にする地に春浦宗熙を開基として清泉寺が創建される。永正17年(1520)には公家で歌人の鷺尾隆康が般舟三昧院に参っている(『二水記』)。

永正15年(1518)成立の『閑吟集』の百七には、「木幡山路に行き暮れて 月を伏見の草枕」の歌があり、大永3年(1523)成立とされる『応仁記』には、かつての伏見殿の宏大さが述べられている。平安時代から室町時代まで、伏見の特に宇治川・巨椋池を望む地域は、月を愛でる風光明媚で山里の風情のある景勝の地として知られ、各時代に貴人の離宮・別荘、菩提寺などが営まれていた。

文禄元年(1592)8月20日から、豊臣秀吉がこの指月の丘に築城を開始する(『兼見卿記』)。はじめは、古来より名所として知られるこの地に秀吉の隠居所として計画されたが、翌年になると本格的な城郭に造り変える工事に着手する。文禄3年(1594)には秀吉はこの伏見城に居を移し、城下町の整備で寺社を移転させる。御香宮神社を城の鬼門守護として大亀谷に移し、大光明寺は相国寺山内に、即成院は大亀谷に、般舟三昧院は京の千本今出川に移した。翌年には聚楽第が徹底的に破却されている。近年の研究で伏見の城下町の造成は、基本となる京町通などの幹線道路を整備し宅地を雛壇状に造り出す大規模な土木工事であったと考えられている。さらに、いわゆる太閤堤を築き宇治川の流れを替える工事も行った。しかしこの指月の城は、文禄5年(慶長元年:1596)閏7月12日に発生した大地震で大破し、在城していた秀吉も命からがら避難したと伝えられる。秀吉は大地震の翌日には新たな城を、指月の北東に当たる木幡山に築くとして工事を開始させる。その翌年には早くも秀吉が木幡の伏見城に移っている。そして慶長3年(1598)8月18日、秀吉はこの伏見城で没する。

秀吉の没後、慶長4年(1599)に徳川家康が留守居役として伏見城に入るが、その翌年、関ヶ原の戦いの前哨戦となる戦鬨で伏見城が豊臣勢によって焼き払われる。慶長6年(1601)、家康は伏見城を再建し、足利学校の校主で南禅寺僧の三要元桔を招き伏見学校(圓光寺)を開く。また城下に伏見銀座を置き、武家屋敷の整備も行った。慶長8年(1603)、家康が伏見城で將軍宣下を受け、慶長10年(1605)には徳川秀忠も伏見城で將軍宣下を受ける。この年、御香宮神社が大亀谷から旧地の現在地に戻る。今回の調査地を含む区画に屋敷を構えた山口直友は、慶長8年(1603)に伏見城番となり、翌慶長9年(1604)には駿河守に叙せられ伏見奉行も兼務した。

慶長16年(1611)、伏見の城下は大火にみまわれる。城下町北部の大半が焼け、大名屋敷も被災した。ただし、多くの大名はすでに駿府城下に転居しており、武家屋敷の再建はあまりなされていないようである。慶長19年(1614)には京と伏見を結ぶ高瀬川が開通し、伏見は徐々に武家政権の町から水運の物流中継地へと変わっていく。

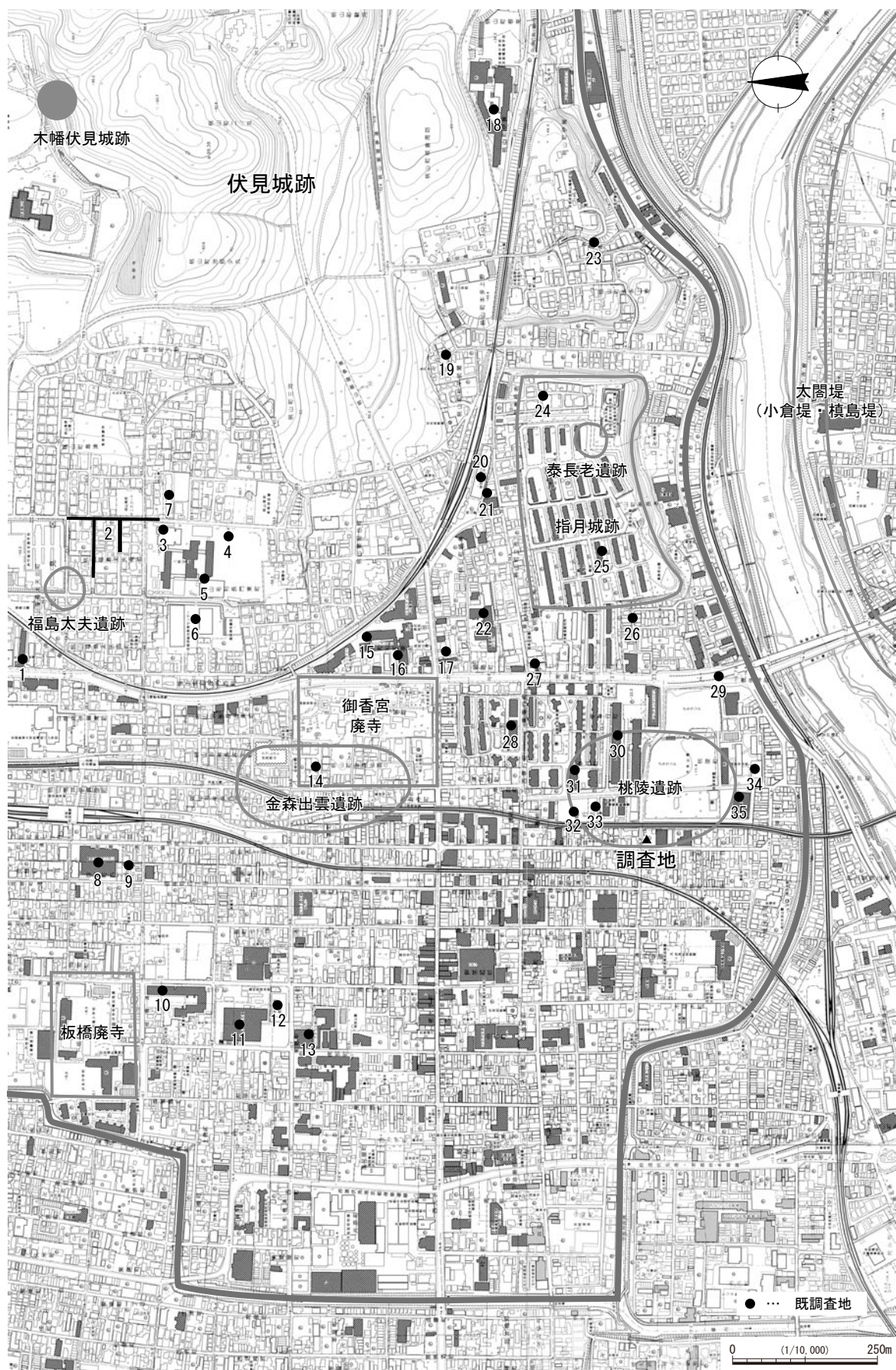
慶長 19 年と翌元和元年（1615）は大坂城をめぐる大坂冬の陣・夏の陣で、秀忠は伏見城に入る。戦いが終結した後、元和 3 年（1617）には伏見城本丸書院の普請があり、この年、秀忠は伏見城でイギリス商館長リチャード・コックスに謁見し（『イギリス商館長日記』）、また第 2 回の朝鮮通信使（回答兼刷還使）も引見するが、元和 5 年（1619）にはこの伏見城を廃城にすることが決まる。元和 9 年（1623）、伏見城で徳川家光の將軍宣下がなされた後、城はことごとく破却され、天守は寛永 3 年（1626）に二条城に移された。伏見城に代わり淀城が築城され、伏見奉行所も開設されて幕府支配の拠点となる。元和 9 年には茶人としても知られる小堀政一（遠州）が伏見奉行に就任し、富田信濃守邸跡に伏見奉行所を移す。寛永 9 年（1632）に完成した奉行所屋敷には、造園家でもあった小堀遠州が風雅を尽くした庭園を築いており、寛永 11 年（1634）の家光上洛の際にはここで茶の饗応がなされた。

寛永 14 年（1637）、笠置屋大倉治右衛門が伏見で酒造りを始めており、明暦 3 年（1657）には伏見の造り酒屋が 83 軒に達したという。寛文 2 年（1662）と元文 3 年（1738）には地震で伏見も各所で被害を受けるものの、17 世紀後半以降、伏見は水陸交通の中継地として繁栄する。元禄 4 年（1691）に長崎オランダ商館付医師ケンペルが伏見を通った際、伏見から京までが一続きの町になっていることを記している（『日本誌』）。享保 2 年（1717）には、京町八丁目で大文字屋呉服店（大丸）が創業する。宝暦 4 年（1754）刊行の『山城南迹巡行志』には「京・江戸往来の荷物問屋ここにあり」とされ、安永 9 年（1780）刊行の『都名所図会』には「伏見船場」が取り上げられている。また同年、地誌『伏見鑑』も出版された。

幕末の混乱期に伏見の船宿・寺田屋において、文久 2 年（1862）に尊王運動をめぐる薩摩藩の内紛と、慶応 2 年（1866）に伏見奉行が坂本龍馬を襲撃した二つの事件が起こる。「大政奉還」後の慶応 4 年（明治元年：1868）には鳥羽伏見の戦いが起こり、伏見奉行所に立てこもる旧幕軍と御香宮神社付近に陣取る新政府軍との戦闘で、伏見奉行所は焼け落ち、市街も被害を受けた。伏見奉行所の跡地は、明治 5 年（1872）以降、第二次大戦後まで陸軍の用地となる。同年、旧土佐藩邸跡には伏水第三校（現在の京都市立南浜小学校）が開校されるなど、近代化も進められた。

明治 27 年（1894）、大阪―伏見―大津を結ぶ水路として鴨川運河（疎水）が完成するが、日清・日露の戦争と前後するように、伏見地域には相次いで鉄道が開通する。明治 29 年（1896）、奈良鉄道（現 JR 奈良線）京都～奈良間が全通。明治 43 年（1910）、京阪電気鉄道京阪本線が開通し、中書島駅から分岐する宇治支線も大正 2 年（1913）に開通。翌大正 3 年、京都電気鉄道（後に京都市電伏見線）の七条駅前～中書島が開通。昭和 3 年（1928）、奈良電気鉄道（現近畿日本鉄道京都線）開通。このように、伏見と京都を結ぶ交通は急速に船便から鉄道に変わっていった。また、大正元年（1912）に伏見城本丸跡付近に明治天皇伏見桃山陵が築造され、昭和 8 年（1933）には巨椋池の干拓工事が始まる（～昭和 16 年：1941）など、景観・環境も変化していった。

昭和 20 年（1945）、第二次大戦の終戦後は伏見の陸軍用地が進駐軍の駐屯地となり米軍の管理下におかれる。米軍撤収後、伏見奉行所跡地の部分は京都市営桃陵団地（桃陵市営住宅）とな



第2図 調査地周辺の遺跡と既調査地点

第 1 表 調査地周辺の既調査地点一覧

番号	調査地点	調査年度・種類	文献名
1	京都市伏見区 桃山福島大夫西町	2007 発掘	『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2007-10 伏見城跡』財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 2008年
2	桃山福島大夫南町	1983 試・立	『昭和58年度京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 1985年
3	桃山毛利長門東町	1983 発掘	『京都府遺跡調査概報 第8冊』 財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1983年
4	桃山毛利長門東町	1982 発掘	『昭和57年度京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 1984年
5	桃山毛利長門東町	1980 発掘	『埋蔵文化財発掘調査概報(1980-1)』 京都府教育庁指導部 文化財保護課 1980年
6	桃山毛利長門東町	1990 発掘	『京都府遺跡調査概報 第44冊』 財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1991年
7	桃山町三河 (三和銀行桃山寮)	1980 発掘	『昭和55年度京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 2011年
8	京町南七丁目	1988 発掘	『昭和63年度京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 1993年
9	京町南七丁目	1987 試掘	『昭和62年度京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 1991年
10	下板橋町	2004 発掘	『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2004-18 伏見城跡』 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 2005年
11	竹中町	2006 発掘	『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006-27 伏見城跡』 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 2007年
12	今町	1986 発掘	『昭和61年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 1989年
13	東組町	1985 発掘	『昭和60年度京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 1988年
14	桃山町金森出雲	1985 発掘	『昭和60年度京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 1988年
15	桃山町松平筑前	1989 発掘	『平成元年度京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 1994年
16	桃山町松平筑前	1997 発掘	『平成9年度京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 1999年
17	桃山町鍋島	2013 発掘	『伏見城跡』-集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 株式会社イビソク 2014年
18	桃山町伊賀 (橘中学・高等学校)	1982 発掘	『昭和57年度京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 1984年
19	桃山町松平武蔵	1989 立会	『平成元年度京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 1994年
20	桃山町立売	1999 発掘	『平成11年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 2002年
21	桃山町立売	1987 発掘	『昭和62年度京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 1991年
22	桃山町立売	2006 試掘	『京都市内遺跡試掘調査報告平成18年度』 京都市文化市民局 2007年
23	桃山町本多上野	1989 立会	『平成元年度京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 1994年
24	桃山町泰長老	1989 立会	『平成元年度京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 1994年
25	桃山町泰長老	2015 発掘	『伏見城跡・指月城跡』 有限会社 京都平安文化財
26	桃山町泰長老	1989 立会	『平成元年度京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 1994年
27	鍋島町	2009 分布	『京都市内遺跡詳細分布調査報告平成21年度』 京都市文化市民局 2010年
28	片桐町 (桃陵市営団地)	1991 発掘	『伏見奉行所発掘調査報告Ⅱ-桃陵団地立て替え工事に伴う埋蔵文化財調査-』 京都市住宅局・伏見城研究会 1997年
29	豊後橋町 (観月橋北詰遺跡)	1974 発掘	『伏見城豊後橋北詰の調査』 伏見城研究会 1975年
30	東・西奉行町	2008 発掘	『伏見城跡・桃陵遺跡発掘調査報告書』 西近畿文化財調査研究所 2010年
31	西奉行町 (桃陵市営団地)	1989 発掘	『伏見奉行所発掘調査報告-桃陵団地立て替え工事に伴う埋蔵文化財調査-』 京都市住宅局・伏見城研究会 1990年
32	奉行前町	2013 発掘	『伏見城跡・桃陵遺跡』 有限会社 京都平安文化財 2014年
33	奉行前町 (財務局桃山宿舍4号棟)	1977 発掘	『伏見奉行所前遺跡発掘調査報告』 伏見城発掘調査団 1977年
34	桃陵町 (桃陵中学校校内)	2015 発掘	『伏見城跡・桃陵遺跡』 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 2015年
35	桃陵町	1988 発掘	『昭和63年度京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 1993年

※ 調査の種類については、発掘調査は発掘、試掘調査は試掘、立会調査は立会、試掘調査・立会調査不明は試・立、分布調査は分布と省略する。

り、昭和 35 年（1959）にその第 1 年次分が完成した。昭和 38 年（1963）には、伏見城花畑跡に遊園地「伏見桃山城キャッスルランド」（現在は閉園）が計画され、伏見城をイメージした鉄筋コンクリート造の天守が建設された。伏見城跡は周知の遺跡として登録されたのが昭和 48 年（1973）になり、これを受けて翌年に豊後橋北詰（宇治川にかかる国道 24 号線観月橋北詰）で、同志社大学と伏見城研究会により伏見城跡についての初めての埋蔵文化財発掘調査が始まった（第 2 図 29）。以来、城下町各所での調査により、徐々に実態が明らかになりつつある（第 2 図・第 1 表）。なお、平成 27 年（2015）の調査では秀吉が最初に建てた指月伏見城の遺構と考えられる石垣が初めて検出された（第 2 図 25）。

今回の調査地については、昭和 26 年（1951）に米穀を扱う山城食糧株式会社（現株式会社京山）が設立され、当地が本社になった。そして、建物の新築や増改築がなされたが、平成 5 年（1993）に旧社屋が解体された後、新社屋建設の事前調査として同年 6 月 17 日に京都市埋蔵文化財調査センターによる試掘調査が行われた。翌年、鉄筋コンクリート造 4 階建て新社屋が竣工している。その後、この建物は株式会社ラプラス・システムの本社となったが、このたび北側に同社の新たな社屋の建設が計画され、その事前調査が今回の発掘調査である。

第 2 章 調査の経過

1. 調査の経過

掘削を開始するにあたって、遺物の取り上げや遺構の認定などのため、今回の調査区を便宜的に西から 1 ～ 3 区に区分した（第 3 図）。重機による掘削は 1 区西端から始めた。地表面から 30cm ほどの深さで東西方向に 1 区西端から 2 区に続く石列の頂部を検出した。その直上までは現代の盛り土であり、石列の北側はさらに石列の石材の厚さ分約 30cm までは現代の盛り土であった。

東方に掘削を続けていくと、3 区の調査区の東端近くでも東西方向に延びる石列を検出した。ここでも石列の直上までは現代の盛り土であった。

調査前の調査地の地表は、東部が高く、西部とは 1m 弱程度の段差があったが（図版 2 - 2）、重機によって現代盛り土を排除していくと、遺構検出面は東から西に緩く傾斜しているものの、東西では明確な段差は成していなかった。

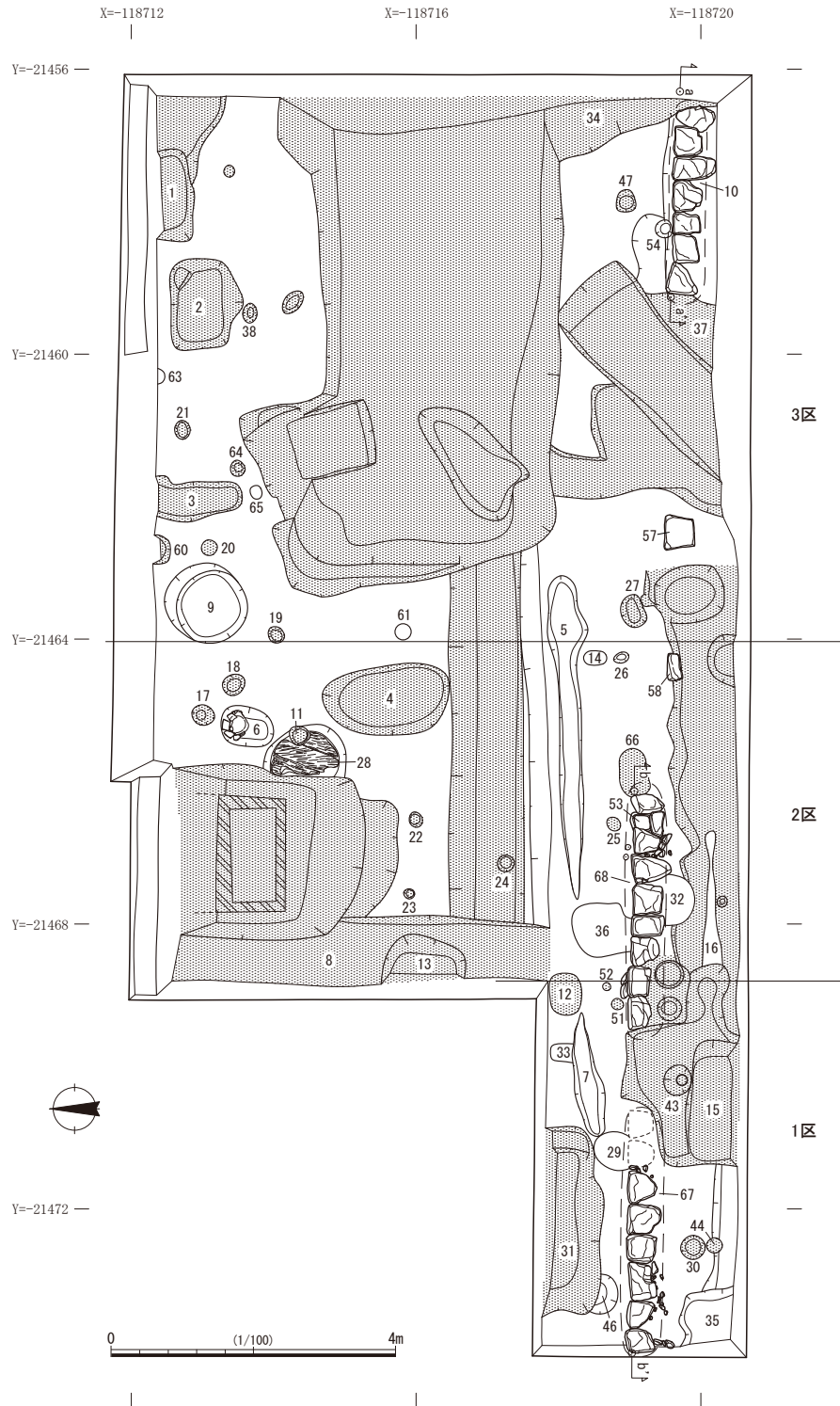
調査区の南北の中ほどあたりは、かなり大きく現代の攪乱が及んでいた。3 区では地下構造物を撤去したらしい大きな掘り込みがあり、地山が深く掘り下げられていた。2 区の北部では地表から深さ 3m にコンクリート製の貯蔵設備の底部が残り、さらに 2 区では東西方向にコンクリートの布基礎が通っていた。これらを撤去・掘削すると、調査区北半では南半の遺構検出面より 50 ～ 60cm 高い位置で近代以前とみられる整地層の広がりが見られ、布基礎の位置あたりで南北に段差が造られていたことが判明した。整地層上面では、現代の掘り込み・小穴などの他、江戸時代の土坑も検出された。

調査区南半で検出した石列は、東西とも北に面を揃えるもので、町家建物の基礎縁石になると思われる。ただし、1・2 区の石列と 3 区の石列では位置がややずれる。3 区の石列は江戸時代にかかると思われるが、1・2 区の石列は少なくとも一部は近代にも据え直されていた。3 区の石列の石材を撤去すると、その直下ではほぼ同位置に並ぶ礎石列を検出した。2 区の石列下でも礎石を 1 箇所検出したが、これに続く礎石は見出せなかった。石列下では礎石列の他、土坑などを検出した。1 区の石列下の遺構 40 では金箔瓦片も出土した。

石列撤去後は、1 区および 2・3 区北半の整地層を掘り下げるにあたり、1 区では東西方向に、2・3 区では南北方向の土層観察用土手を設定し、整地層の掘削を行った。

3 区では、石列や礎石列は黄色の地山を少し掘り込んで据えられていたが、1 区の石列の下層は暗茶褐色の盛り土の整地層で、この盛り土には近世以前の遺物が少なからず混入していた。遺物の年代は弥生時代から室町時代まであり、多くはかなり摩滅しているものであった。また、1 区から 2 区にかけては、現代攪乱層中の褐色土ブロック中にも古代の遺物が含まれていた。

2・3 区北半の整地層は主に黄褐色～灰褐色土で、掘削した地山の土を運び入れて均したものであると思われ、この層中には遺物は全く見られなかった。



第3図 検出遺構平面図1

1 区の南端は石列の背後になるが、この箇所は近代の水溜め状の設備などが造られていて、それが撤去されているなど攪乱が多かったが、調査区南壁際で南に深く落ち込んでいく遺構を検出した。また、2 区から 1 区にかけての南壁際で、水流によって形成されたとされる東から西に下がる溝状遺構を検出した。この溝状遺構の東端は礫を詰めた暗渠状になり、上記の落ち込みに続いていた。落ち込みを検出した位置は、当初に予想していた京町通の東側溝（堀）の通る位置

第2表 検出遺構一覧

遺構番号	区	遺構種類	埋土	年代	遺物	備考
1	3区	土坑		近現代	コンクリート片	漆喰使用
2	3区	土坑		現代	コンクリート片	
3	3区	土坑		現代	コンクリート片	
4	2区	土坑		現代	コンクリート片	
5	2区	溝状遺構	暗褐色粘質土	近現代		遺構7に続く
6	2区	埋壘遺構		近代	壘、瓦、ガラス	便槽か
7	1区	溝状遺構	暗褐色粘質土	近現代		遺構5に続く
8	2区	重機掘削跡		現代		
9	3区	土坑	灰混り黒色土	江戸時代後期	棧瓦、寛永通宝、土器、陶器	ゴミ捨て穴
10	3区	石列3(東西、7石)		江戸時代		溝状掘方
11	2区	小穴		現代	遺物なし	
12	1区	土坑		現代		
13	2区	土坑		現代	遺物なし	
14	2区	土坑		現代		
15	1区	水溜		現代	遺物なし	レンガ積み
16	2区	溝状遺構	褐色土	江戸時代初期か	遺物なし	自然形成流路か
17	2区	小穴		現代	遺物なし	
18	2区	小穴		現代	遺物なし	
19	3区	小穴		現代	遺物なし	
20	3区	小穴		現代	遺物なし	
21	3区	小穴		現代	遺物なし	
22	2区	小穴		現代	遺物なし	
23	2区	小穴		現代	遺物なし	
24	2区	小穴		現代	遺物なし	
25	2区	小穴		現代	遺物なし	
26	2区	小穴		現代	遺物なし	
27	3区	土坑		現代	遺物なし	
28	2区	埋桶		江戸時代か		桶底板の木質残る
29	1区	土坑		江戸時代		
30	1区	土坑		現代		
31	1区	基礎掘方		現代	ガラス、コンクリート片	コンクリート基礎
32	2区	土坑		江戸時代		
33	1区	土坑		不明		
34	3区	重機掘削跡		現代	コンクリート片	重機掘削跡
35	1区	土坑?	灰混り黒色土	江戸時代		ゴミ捨て穴?
36	2区	土坑		不明		
37	3区	重機掘削跡		現代		
38	3区	小穴		現代		
39	3区	土坑		江戸時代か		
40	1区	土坑		江戸時代前期	金箔瓦、瓦類、土器、陶器	
41	3区	礎石掘方		江戸時代		礎石抜け跡
42	3区	土坑	灰混り黒色土	江戸時代	瓦燈、焙烙	ゴミ捨て穴 48・49と一連の土坑
43	1区	ボーリング井戸		現代		塩ビパイプ入り
44	1区	小穴		現代	遺物なし	
45	1区	水落		江戸時代初期		立方体石材を据える
46	1区	土坑		江戸時代か		
47	3区	小穴		現代		
48	42と一連の土坑					
49	42と一連の土坑					
50	欠 番					
51	1区	小穴		現代	遺物なし	
52	1区	小穴		現代	遺物なし	
53	2区	雨落櫓		～現代	遺物なし	石列1東端 漆喰で固める
54	3区	小穴		現代	遺物なし	
55	3区	礎石		江戸時代	遺物なし	石列3下層
56	欠 番					
57	3区	礎石		江戸時代	遺物なし	
58	2区	礎石		江戸時代	遺物なし	
59	2区	礎石		江戸時代	遺物なし	石列2下層
60	3区	土坑?		現代		
61	3区	小穴		現代	遺物なし	
62	欠 番					
63	3区	土坑?		現代		
64	3区	小穴		現代	遺物なし	
65	3区	小穴		現代	遺物なし	
66	2区	避雷針アース埋設坑		現代	遺物なし	
67	1区	石列1(東西、6石)		江戸～近代		石列1-2は一連
68	1-2区	石列2(東西、8石)		江戸～近代		石列1-2は一連
69	1区	落ち込み遺構		桃山～江戸時代前期		京町通東側溝(堀)の北端か

であったが、この落ち込みより北では、溝の通っていた形跡は認められなかった。このため、想定される京町通の東側溝は今回の調査区の南端あたりで途切れることが考えられた。

3区で検出した礎石列は東西方向で、これより北は段差が付くため建物は南になると思われる。当初の調査区内では確認できないので部分的に調査区の拡張を行ったが、その部分には現代の攪乱があり、礎石を伴う建物についてはこれ以上の追求はできなかった。

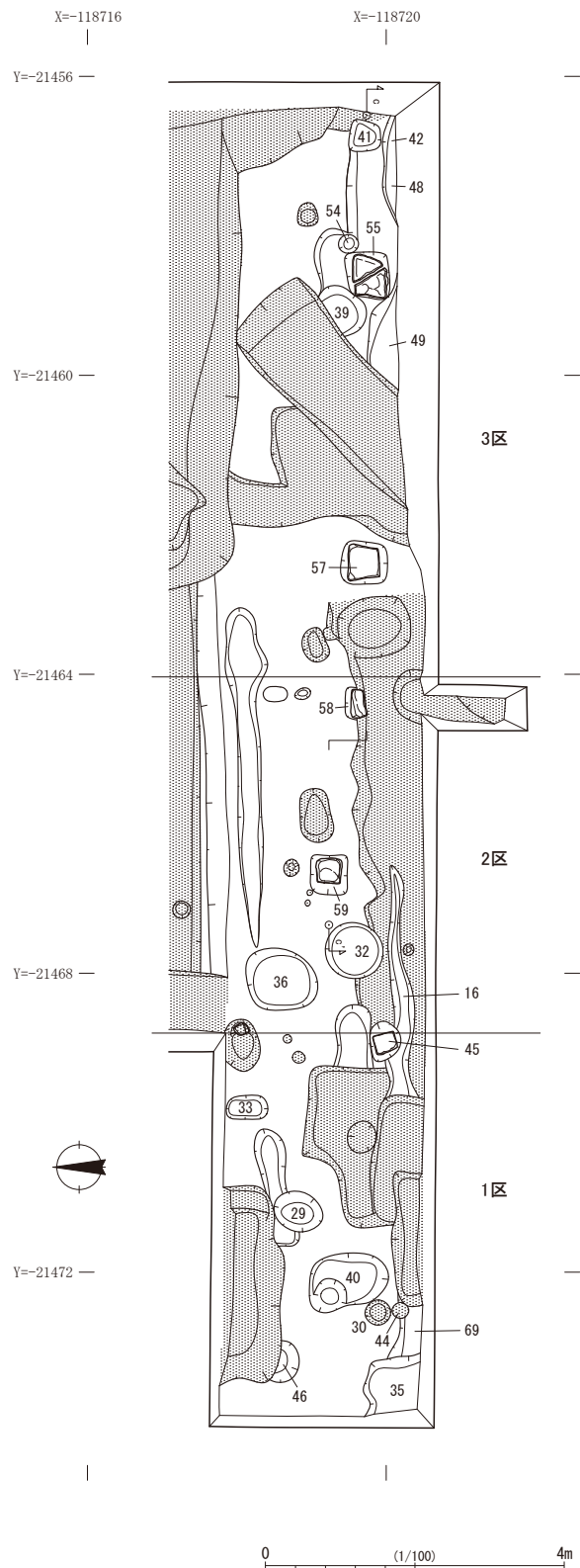
最終的に写真撮影と電子平板による記録を取り、調査区西端部の暗茶褐色土整地層の裁ち割を行って下層の確認をした後、重機によって埋め戻し現場調査を終了した。

なお、調査の終盤には、主に地域の方々と事業所社員を対象とした現地説明会を実施した。参加者の延人数は115名にのぼった。

2. 調査日誌抄

平成27年(2015) 11月2日～12月18日

- 11月2日(月) 現場調査開始。機材等整理。重機搬入。周囲の養生。調査区の設定、京都市・馬瀬氏確認。
- 11月4日(水) 重機掘削。調査区南部の西寄りと東寄りで、いずれも面を北に向けた東西方向の石列を検出。
- 11月5日(木) 重機掘削。
- 11月6日(金) 重機掘削終了、重機搬出。基準点測量。
- 11月9日(月) 排水作業。壁面土層整形。
- 11月10日(火) 第1遺構面精査。現代攪乱坑掘り上げ。
- 11月11日(水) 現代攪乱坑掘り上げ。南部の石列清掃。
- 11月12日(木) 第1遺構面清掃。
- 11月13日(金) 遺構面清掃。第1面全景写真撮影。
- 11月16日(月) 排水作業。第1遺構面測量(電子平板)。



第4図 検出遺構平面図2



1. 重機掘削開始 (1 区)



2. 調査風景 (3 区)



3. 調査風景 (1・2 区)



4. 現地説明会風景



5. 測量風景 (3 区)



6. 重機による埋戻し

第 5 図 調査風景

- 11 月 17 日 (火) 午前、測量続き。第 1 面検出遺構掘削。北半部は厚さ 20 ～ 30cm の整地層が広がり、南半部より 50 ～ 60cm 高くなる。
- 11 月 18 日 (水) 雨天で作業休止。
- 11 月 19 日 (木) 南端部の東西方向石列を一部撤去。北半部遺構掘削。
- 11 月 20 日 (金) 西端部の現代攪乱坑掘り上げ。南端部の石列の直下に 2 箇所礎石状の石が据えられているのを確認。
- 11 月 24 日 (火) 西部の遺構掘削。
- 11 月 25 日 (水) 南端部の東西方向石列を撤去。東寄りの石列下でほぼ同位置の礎石列を検出。

- 11月26日(木) 排水作業。遺構面清掃。礎石写真撮影。
- 11月27日(金) 遺構面清掃。第2面全景写真撮影。測量(電子平板)。土層観察用土手を3箇所設定。検討委員・南氏来訪。
- 11月30日(月) 北半部整地層掘削、整地土内からは遺物皆無。
- 12月1日(火) 北半部整地層掘削。地山面は東北から南西に緩く傾斜する様子。
- 12月2日(水) 北半部整地層掘削、東寄りでは地山面になる。西端部の北半を裁ち割り掘り下げ(GL-1500まで)。
- 12月3日(木) 北半部の整地層掘削。午後、(株)ラプラス・システム社員向け説明会(参加者40名)。
- 12月4日(金) 南西部精査。午後、社員向け説明会2回目(参加者30名)。
- 12月5日(土) 京都市・馬瀬氏視察。遺構検出面清掃。午後、地元向け現地説明会(参加者45名)。
- 12月7日(月) 北半部整地層掘削。南西部で南壁際に大きな落ち込み。南端中央部に、礎石の続きの有無確認のサブトレンチ設定・掘削。
- 12月8日(火) 南西部の落ち込みに続く暗渠状遺構精査。
- 12月9日(水) 南西部落ち込み清掃。北西隅部掘削。文化庁・水ノ江調査官視察、京都市・馬瀬氏と京都府・奈良氏が案内。
- 12月10日(木) 完掘状況全景写真撮影。測量。
- 12月11日(金) 雨天で作業休止。
- 12月14日(月) 京都市・馬瀬氏検査。排水作業。測量。土層断面撮影。検討委員・山田氏来訪。
- 12月15日(火) 確認精査。追加測量・部分撮影等。
- 12月16日(水) 南西隅部裁ち割り掘削、確認精査。南西部落ち込みが京町通側溝(堀)の北端になる可能性が考えられる。部分撮影等。
- 12月17日(木) 重機搬入、埋め戻し。機材等整理。
- 12月18日(金) 埋め戻し終了、重機搬出。調査地周辺遠景写真撮影。機材等撤収。現場調査終了。

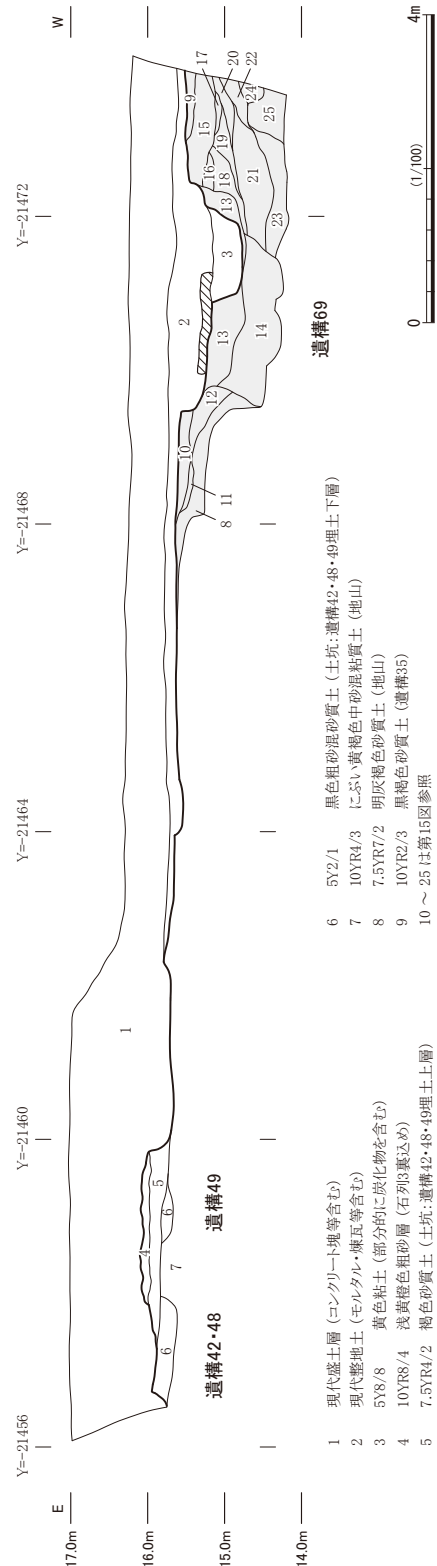
第 3 章 基本層序

今回の調査区は、基本的には東北が高く、南西が低くなっていたが、調査区内はほぼ全面的に現代の削平や掘削を受け、その上に厚く盛り土されていて、現地表面から石列などの遺構検出面までは、ほとんど一時期の現代の重機による整地層である。当初、調査区南半で東西に段差があったのもこの整地の際の工事によるものであった。

調査で掘削を開始した段階の南半での標高は、東端部で 17.0m、西端部で 16.2m ほどであったが、近代以前の遺構検出面（石列頂部）の標高は東端部で約 16.2m、西端部で約 16.0m であった。北半では掘削開始時の標高が 17.2m、遺構検出面は整地層の上面になり、標高 16.4m ほどであった。

北半部では本来の黄灰色の地山面の上に、同様の黄灰色を呈する盛り土の整地層がある。この整地層は 30 cm ほどで、元の厚さよりかなり削平されていると思われる。南半部の東寄りでは地山の黄褐色土の直上に礎石などが据えられている。南半部西寄りでは、地山が黄褐色土から灰褐色の砂質土に漸次移行し、地山面の標高も東寄りでは約 15.8m であるが西寄りでは、1 区と 2 区の境あたりで約 15.6m、西端部で約 14.6m と下がっていく。西端の 1 区では、灰褐色砂質土の上部に暗灰褐色を呈する砂質土の層がある。地山の下がっている場所に盛り土をして、東側の地山面と高さを揃えるように整地がなされているとみられる。この整地面上に石列が設けられ、また江戸時代の土坑が掘り込まれていた。

今回の調査区内では、火災による焼土の層は見当たらなかった。鳥羽伏見の戦いでは調査地にも近い伏見奉行所が焼失し町家も被災したといわれるが、少なくとも調査地辺に戦火は及んでいないようである。なお、調査区南壁の土層（第 6 図）の西端部は、後述の落ち込み遺構が絡んでいる状況である。



第 6 図 調査区南壁土層断面図

第4章 検出遺構

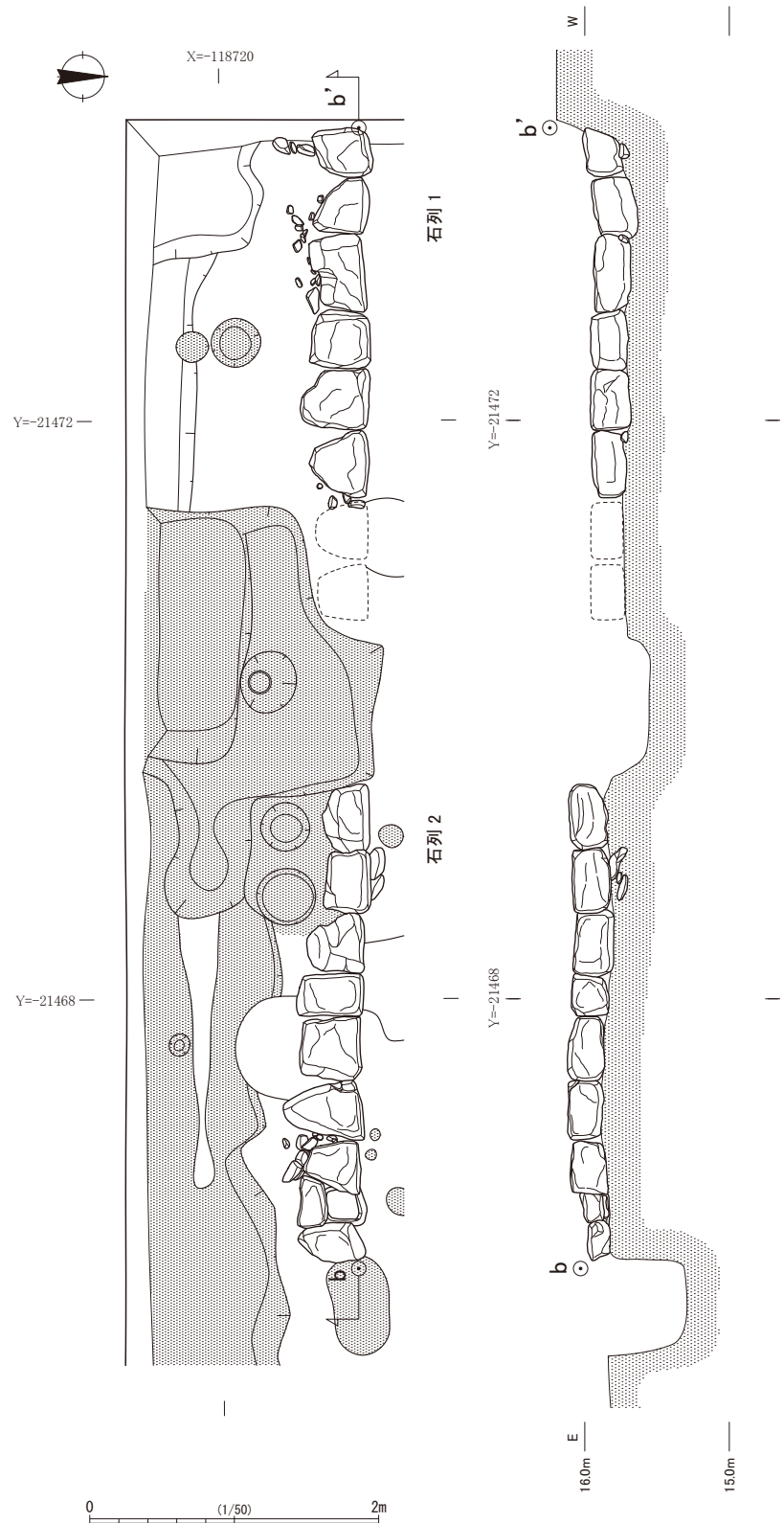
1. 遺構の概要

今回の調査では、調査区内の多くの部分に現代の地下工作物撤去などの攪乱があり、調査区の南北が分断されるような状況であった。しかし、残された南端部分では江戸時代の遺構が検出され、石列、礎石列、土坑などが検出された。また、調査区北部では伏見城下整備の初期段階の造成とみられる盛り土の整地層があり、江戸時代の土坑などが検出された（第2表）。なお、今回の調査区内では現代のボーリング井戸以外には井戸を検出していない。

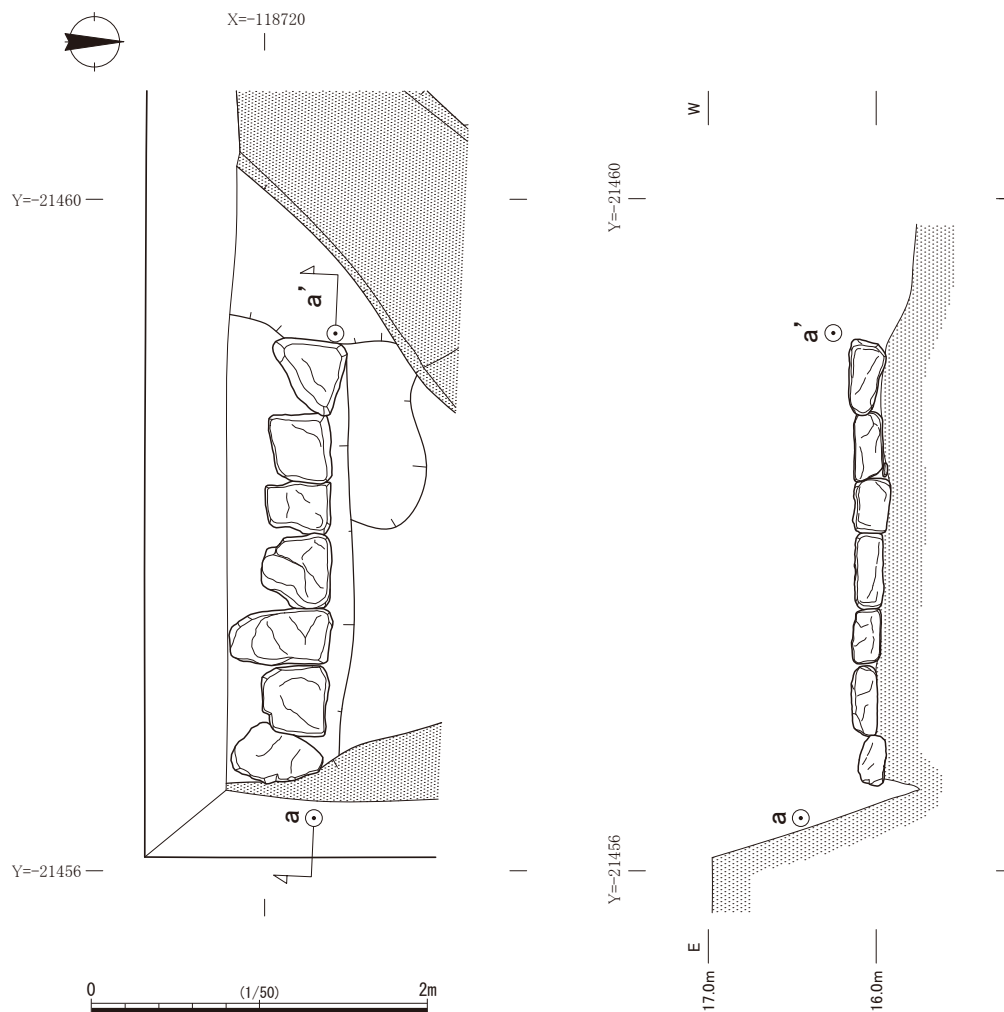
2. 石 列

（図版3～5、第7・8図）

1区から2区にかけて検出した石列1・2（遺構67・68）は、北の面を一直線に揃えて据えられていて、途中に攪乱を受けて途切れる箇所があるが、調査区西端から東に7.3m続く。北面の方位はN-89°-Eである。西側は調査区外に続き、東側は攪乱のためど



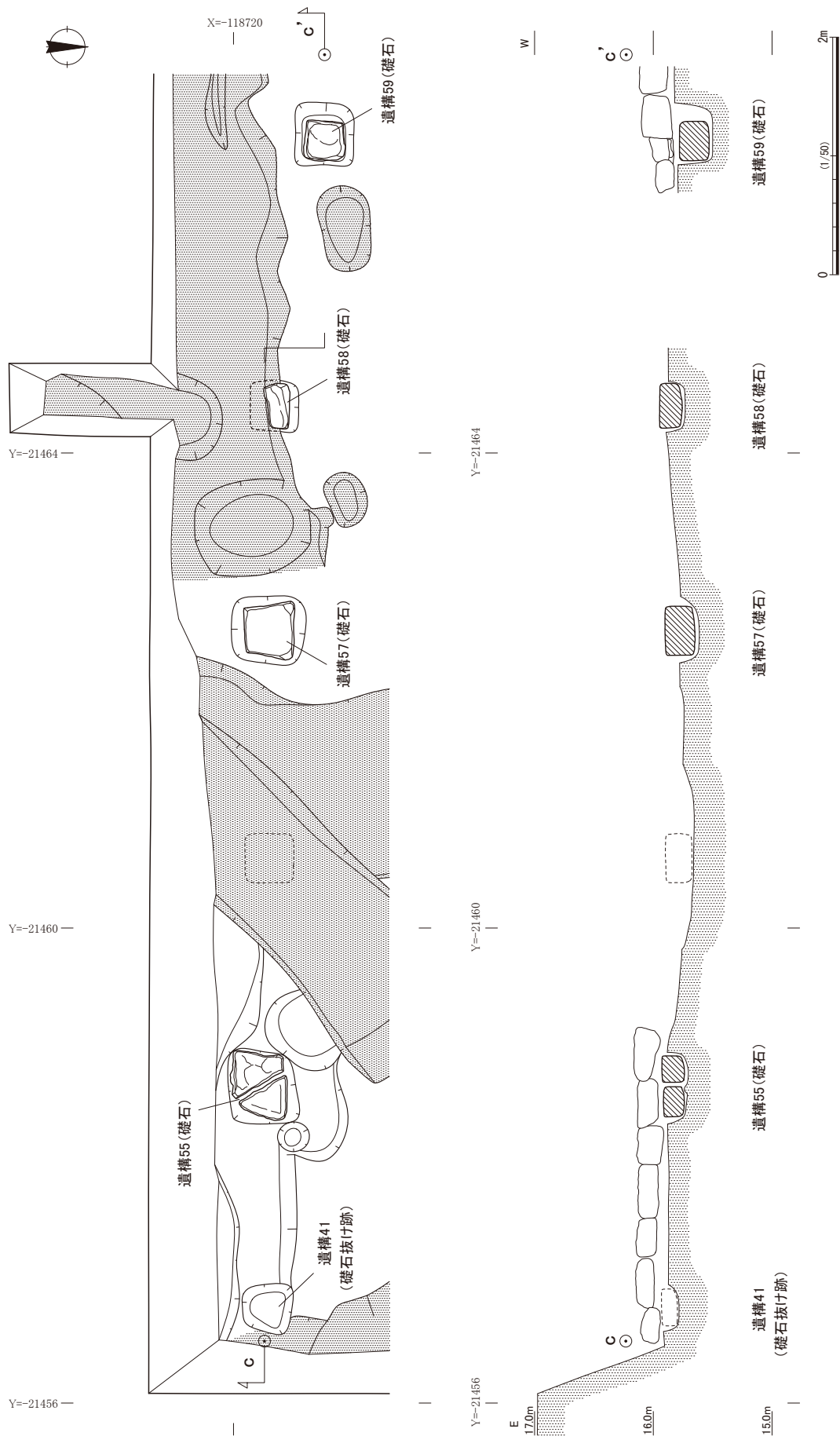
第7図 石列1、2平面・立面図



第8図 石列3平面・立面図

こまで続くかは不明である。石材は主に花崗岩系で、幅 40cm 前後、奥行き 30 ～ 40cm、厚さは 25cm 前後のやや不揃いの石である。検出した石列は 1 段で、2 段目を積んでいた形跡はなく元から 1 段だけであったと見られる。石材上面の高さは、石列 1 と石列 2 で 15cm 程度の高低差があり、段差がついていたらしい。また、石列 2 の東端部には、1 石分を奥ませ底部を漆喰で囲った水落ち設備がつくられていた。石列 1・2 とも石材を据える際には地面に直接並べていったようで、裏込め石なども所々に詰められる程度で、あまり堅固にはつくられていなかった。なお、裏込めに煉瓦が詰められている箇所もあり、少なくとも部分的には近代に据え直されているようである。

3 区の調査区東端部で検出した石列 3（遺構 10）は 2.5m 分の石材が残っていたが、この東西は過去の重機掘削で失われていた。石列 3 も石列 1・2 と同様に、北に面を向けて 1 段だけ並べられていたと見られる。北面の方位は N-87° -E である。石列 3 の石材の上面は石列 2 より 20cm ほど高くなり、北面は、石列 1・2 の北面の延長線より 50cm ほど南に寄った位置になる。この石列 3 の設けられているところは地山が露呈しているところで、石材は地山を少し掘り込んで据えられている。また、石列の背後は粗い砂が裏込めとして詰められていた。



第9図 礎石列平面・断面図

石列 1～3 はいずれも建物の縁石と見られ、北に面を向けて長く延びることから、調査地西側の京町通に間口を開く建物の北端になると考えられる。同様の縁石の例は、現在も京町通沿いの町家建物に見ることができる（第 30 図）。

3. 礎石列（図版 6・7、第 9 図）

3 区の石列 3 の石材を撤去したところ、石材の直下で礎石（遺構 55）を検出した。また、石列の東端の石材は過去の掘削で少し動いていた状態であったが、この石材の下からは礎石掘方と見られる窪み（遺構 41）も検出された。これは、石列 3 の西側で先に検出していた礎石 2 基（遺構 57・58）とも同一軸線上に並び、一連の建物礎石掘方と考えられる。57 と 58 の中心の間隔は 1.9m で、41 と 55 の中心の間隔も 1.9m であった。さらに、55 と 57 の中心の間隔は 3.8m となる。55 と 57 の間は過去の重機掘削で掘り下げられていたが、この箇所に礎石があったことを想定すると、柱間が 1.9m 等間の礎石列になると思われる。軸線の方位は N- 89° -E である。

この礎石列の礎石は、石材より若干大きく地山を掘り込み、栗石は用いず堅固に突き固めて据えられているようで、石材を撤去すると掘方底面に石材の圧痕が明瞭に認められた。なお、57 は 1 石であるが、55 は三角形の 2 石を組み合わせていた。58 は 57 の半分ほどの石材だが、南半が削平されており、元は長方形の 2 石を組み合わせて礎石としていたものかと思われる。

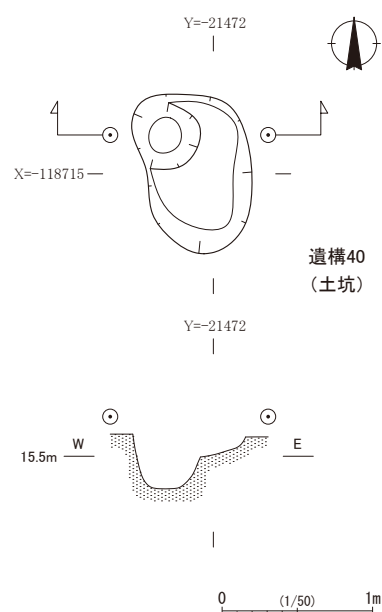
礎石列は東の調査区外に続く可能性もあるが、58 より西では同一軸線上には続かず、58 がこの礎石列の西端と見られる。礎石列の北は地山が高まっており、建物は検出した礎石列を北辺として南にあったと想定され、58 が建物北西角になる可能性が高い。そのため南側の確認のために 58 の南方に拡張トレンチを設定した。58 の位置から 2m 南まで拡張したが、この部分は現代の掘削が深くまで入っていたため、礎石の有無などはわからなかった。

この礎石列は、石列 3 と同位置にあり、石列の石材は礎石のほぼ直上にある状態で、礎石列は石列の建物の前身建物であったことも考えられる。なお、2 区でも石列 2 の直下から礎石が 1 基検出された（遺構 59）。3 区の礎石列と同様の状況で礎石の据え方も共通するが、これとは軸線が通らずに間隔も異なる。石上面の高さも、東の礎石列の高さより 15cm 程度低いため、59 は別の建物の礎石と思われる。ただし、59 に続く礎石は他に見出せなかった。

4. 土 坑

遺構 40（第 10 図）

1 区の石列 1 の下層で検出された土坑である。石列の石材を撤去した段階で遺構の輪郭が認められた。平面形は南北 1.1m、東西 0.7m ほどの隅丸長方形で、深さは 25cm 程度であった。底面はほぼ平坦であるが、北東隅部が径約 30cm の円形に深く



第 10 図 遺構 40 平面・断面図

窪んでいた。埋土は暗褐色の粘質土で、遺物には瓦類が多く土器・陶磁器類もあり、金箔瓦の破片も出土した。

遺構 29（第 3・4 図）

1 区の石列 1 の北側で検出した土坑で、土坑南端は石列 1 の下にかかるものであった。平面形は南北 70cm、東西 50cm ほどの楕円形で、深さは 50cm 程度であった。埋土は上層が灰混じり黒褐色土で、下層は暗褐色土であった。遺物は上層に多く含まれていて、土器・陶磁器類や瓦片などがあり、遺構の輪郭検出時から上面に信楽の甕片が数点露呈していた。

遺構 42・48・49（第 4 図）

3 区の東南隅部で検出した土坑の北端で、石列 3 の下層になる。ただしこの土坑の大部分は南の調査区外になるようである。埋土は灰混じりの黒褐色土と褐色土で、土器・陶磁器類を含む。塵芥処理のやや大きなゴミ捨て穴と見られる。石列 3 の下層では礎石列を検出しているが、この土坑は礎石堀方の際まで掘り込まれているものの、これを削り込むことはない。ちょうど礎石を避けるように掘削されたかに見える。当初は 3 基の別の土坑としていたが、礎石撤去後の精査で一連の土坑であることを確認した。

遺構 9（第 11 図）

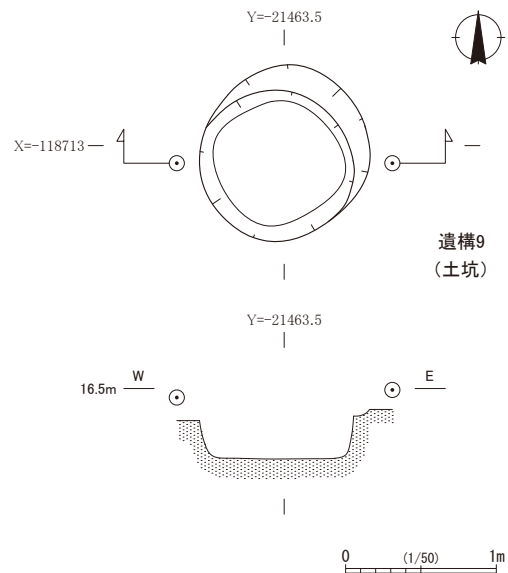
2 区の北端近くで検出された土坑である。平面形は径約 1m の円形で、深さは中央部で 20cm ほどであった。上部がかなり削平されていると思われる。埋土は灰混じりの黒褐色土で、これも塵芥処理のゴミ捨て穴であろう。遺物には、土器・陶磁器類や棧瓦片を含む瓦類、寛永通宝、煙管の吸口などがある。

遺構 35（第 3 図）

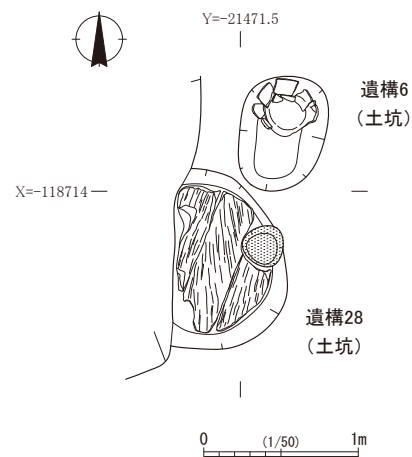
1 区の調査区南西隅で一部を検出した土坑で、土坑は調査区外に続くため規模は分からない。検出面からの深さは 15cm ほどであった。この土坑の埋土も灰混じりの黒褐色土で、塵芥処理の穴になろう。

遺構 6（第 12 図）

2 区の北部で検出した甕を埋め込んだ遺構である。重機掘削の段階から検出していた。堀方は南北 70cm、東西 50cm ほどの小判形で、その北寄りに甕が据えられていた。深さは 15cm ほどで、上部は以前の掘削で失われている。おそらく便槽と思われるもので、甕内部は灰混じりの黒色土で埋まり煉瓦片やガラス片も混じっていた。



第 11 図 遺構 9 平面・断面図



第 12 図 遺構 6、28 平面・断面図

遺構 28（第 12 図）

遺構 6 の南で検出した桶を埋め込んだ遺構である。底板の木質がかるうじて残存していたが、側板は残っていなかった。桶の直径は約 90cm であった。深さは 15～20cm ほどで、上部がかなり削平されていると見られる。掘方は桶の径より少し大きい程度である。

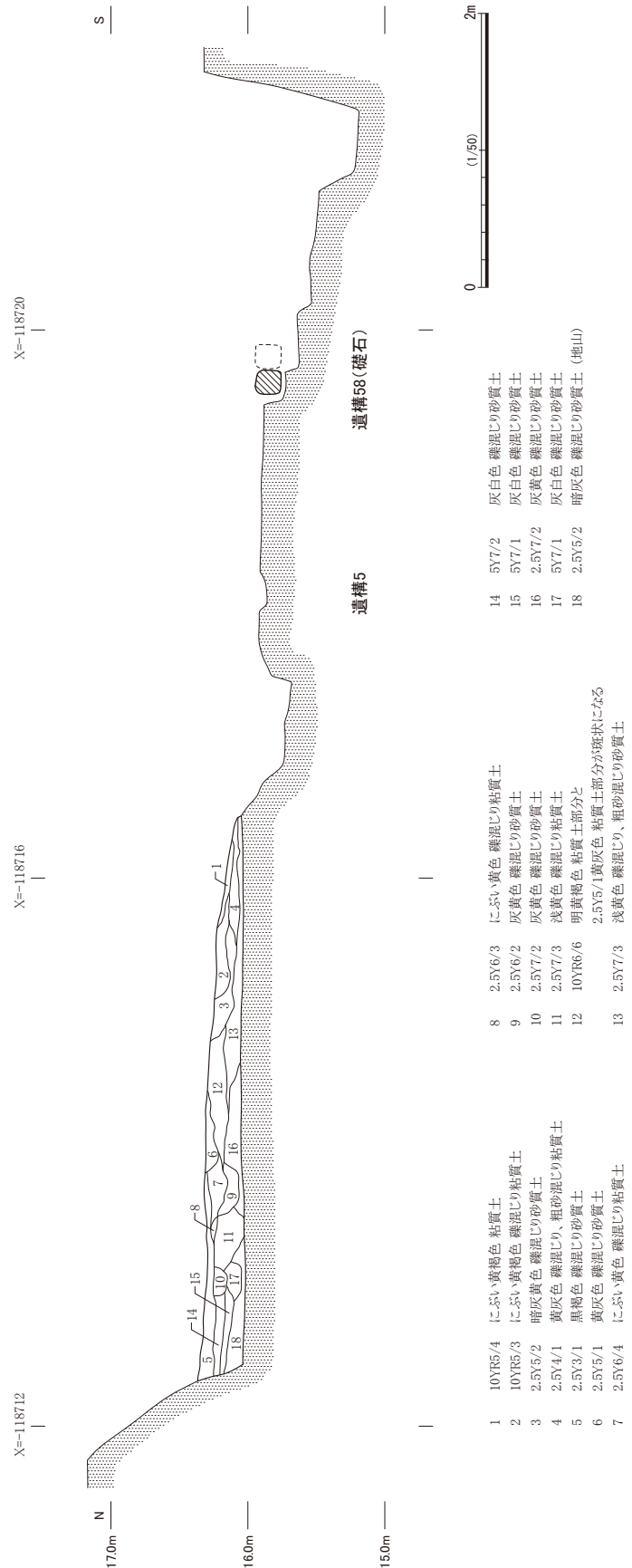
5. 整地層

北半部の整地層

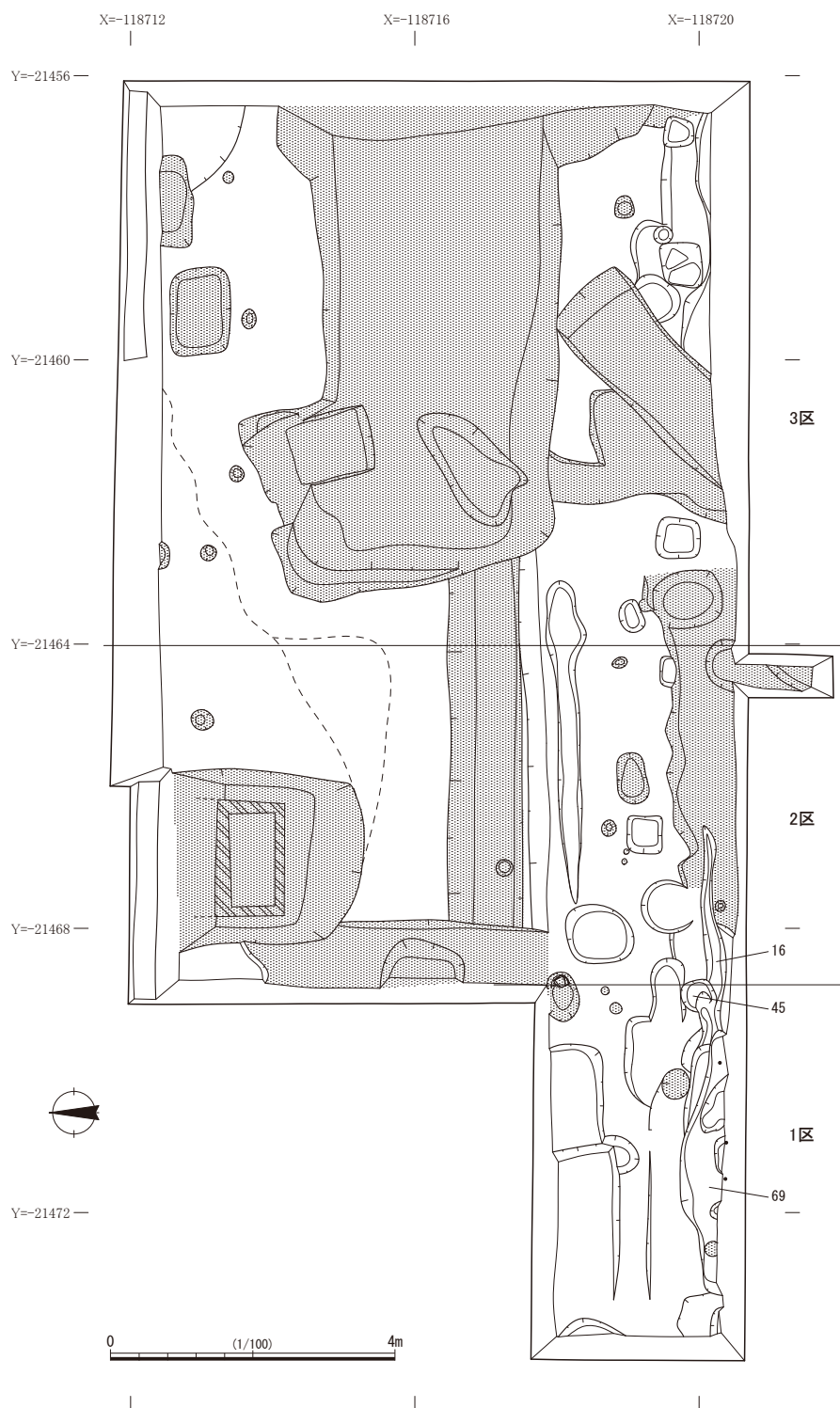
2・3 区北半の地山面は、東北から西南に緩く傾斜しており、その上に盛り土の整地が成されていた。整地層は概ね黄褐色土の塊を含む土と白色の砂粒を多く含む土で、近辺で掘削した地山の土を運んで均し造成したとみられる。この整地層中からは遺物は全く認められなかった。検出した整地層の上面から地山面までの盛り土の厚さは 10～30cm 程度であったが、この整地層に掘り込まれていた土坑（遺構 9）の深さなどの状況から、本来の盛り土は少なくともさらに数十 cm は厚かったとみられる。

西南部の整地層

調査区西南部の、石列 1 の据えられていたあたりの地面は地山ではなく、褐色土が広がっていた。この層は細かく分層すると、20～40cm ほどの厚さで傾斜・分断しながら堆積している状況であった。ここでは、北半部の整地層のような地山を削っ



第 13 図 北半部整地層土層断面図



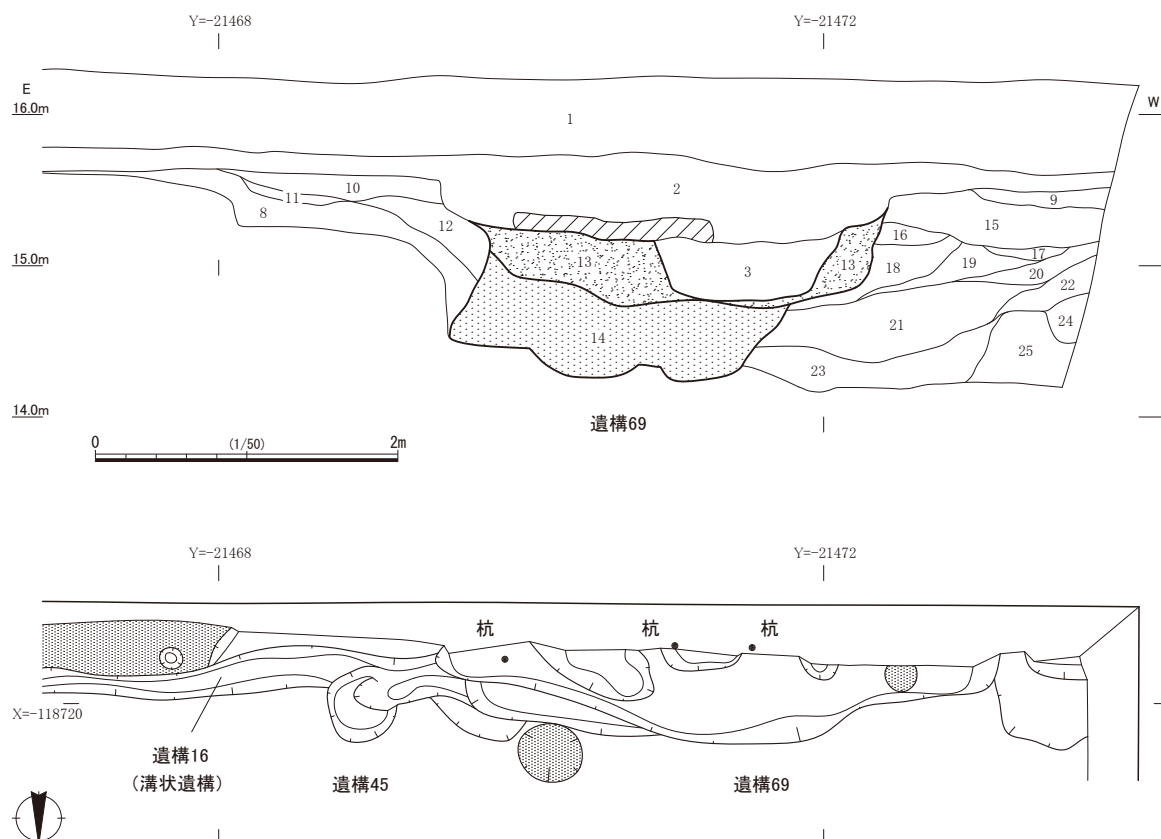
第14図 検出遺構平面図3

た土は入っていない。各層中には古代～中世の遺物が混在して含まれていたが、桃山時代以降の遺物は見出せなかった。

6. 落ち込み（京町通東側堀北端）（図版9～11、第14・15図）

1区南端部の石列1・2より南側は、近現代の攪乱がかなり入っていたが、その下層で南に下

- | | | |
|---------------------------|----------------------------------|---------------------------|
| 1 現代盛土層 (コンクリート塊等含む) | 12 10YR5/2 灰黄褐色砂質土 | 19 10YR5/4 褐色砂質土 (整地土層) |
| 2 現代整地土 (モルタル・煉瓦等含む) | 13 礫層 (暗渠状遺構) | 20 10YR5/1 灰褐色砂質土 (整地土層) |
| 3 5Y8/8 黄色粘土 (部分的に炭化物を含む) | 14 5Y6/2 灰オリーブ色砂質土 (落ち込み埋土、遺構69) | 21 7.5YR6/1 褐灰色砂質土 (整地土層) |
| 8 7.5YR7/2 明灰褐色砂質土 (地山) | 15 10YR5/4 褐色砂質土 (整地土層) | 22 7.5YR4/2 灰褐色土 (整地土層) |
| 9 10YR2/3 黒褐色砂質土 (遺構35) | 16 10YR5/4 褐色礫混砂質土 (整地土層) | 23 10YR5/4 にぶい黄褐色土 (整地土層) |
| 10 2.5Y6/6 明黄褐色砂質土 | 17 10YR6/2 灰黄褐色砂質土 (整地土層) | 24 10YR3/3 暗褐色土 (整地土層) |
| 11 10YR6/2 灰黄褐色砂質土 | 18 10YR5/2 灰黄褐色礫混砂質土 (整地土層) | 25 10YR5/6 黄褐色土 (地山か) |



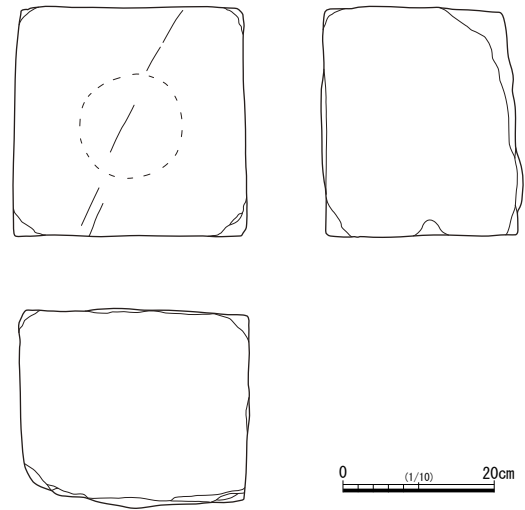
第 15 図 調査区南西部遺構検出状態

がる落ち込み (遺構 69) が検出された。この地点は、当初の京町通東側の側溝あるいは堀が通るかと思っていたところであった。しかし後述のように「堀」そのものは検出されなかった。

1 区の調査区南壁際に煉瓦で囲われモルタルで固めた水槽状の施設 (遺構 15) があり、これを撤去すると暗渠状の礫の層が現れた。礫は概ね拳大の円礫で、礫と礫の間には暗褐色の粘質土が詰まっていた。この礫層は東から西に下り、さらに南に下りながら調査区外に続いている。2 区から 1 区にかけての調査区南壁際で東西方向の溝状遺構 (遺構 16) を検出した。この遺構は若干蛇行しながら幅を広げて上記の暗渠状礫層に続く。16 は、断面形が U 字または V 字状になり底も不整形であることから、水流の浸食により自然に形成されたものとみられる。暗渠状礫層の礫を撤去すると、16 と同様の状況で、所々に水流の落差によりできたらしい滝壺状の窪みがあった。1・2 区の境にできていた深い窪み (遺構 45) には、五輪塔の地輪状の花崗岩質の石材 (第 16 図) が投入されていて、この石で流れ落ちる水を一旦受けるようにしたかと思われる。

落ち込みは主体が南の調査区外にあると見られ、調査区内で検出したのはその北端にあたる。落ち込み肩部や壁面は不整形で、人為的に成形したものではなく、もとの壁面が崩落しているよ

うな状況であった。落ち込みの、検出した部分の底は地山層と見られる明灰褐色の砂質土で、これが水で抉られ、その上層が崩落したものと思われる。上記の暗渠状礫層はある時点から、この落ち込みの東北隅あたりで、東からの水流を誘導するように設けられたと考えられる。また、落ち込み底部の東寄りには、径 5cm ほどの杭跡 3 本分が東西に並んで検出された。おそらく仮設的な土留めのための杭であろう。遺構 69 の検出位置は設定した調査区の最南端で、既存建物への通路があり南への拡張が困難な場所であったため、この遺構のこれ以上の追求はできなかった。



第 16 図 遺構 45 石材実測図

なお、この遺構からは時期の判定できる遺物が出土していないため年代を限定できないが、埋土上層の状況などから江戸時代前期の段階で埋没したものと思われる。

第 5 章 出土遺物

1. 遺物の概要

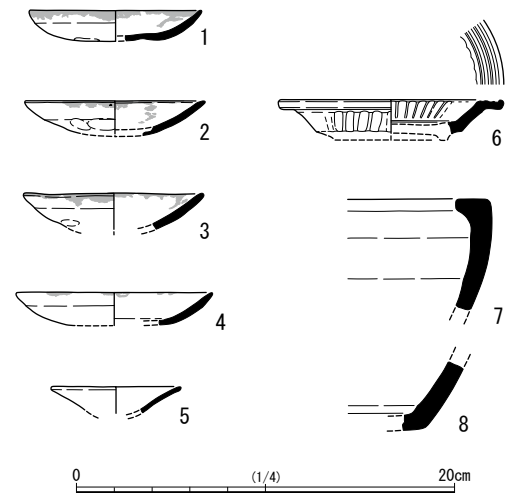
今回の調査で出土した遺物の総量は、現代の攪乱層中に混じっていた遺物も含めて整理箱（コンテナバット）にして 10 箱分である。調査区の面積に比して多くはないであろう。調査区北半部では、若干の江戸時代の遺構中以外からはほとんど遺物は出土せず、遺構に伴う遺物の大半は調査区南半部からの出土であった。

遺物量の半数ほどは江戸時代から現代までの瓦類で、金箔瓦も 2 点出土した。江戸時代の土器・陶磁器類も比較的少量である。

2. 土坑出土遺物

遺構 40 出土遺物（図版 14、第 17～19 図）

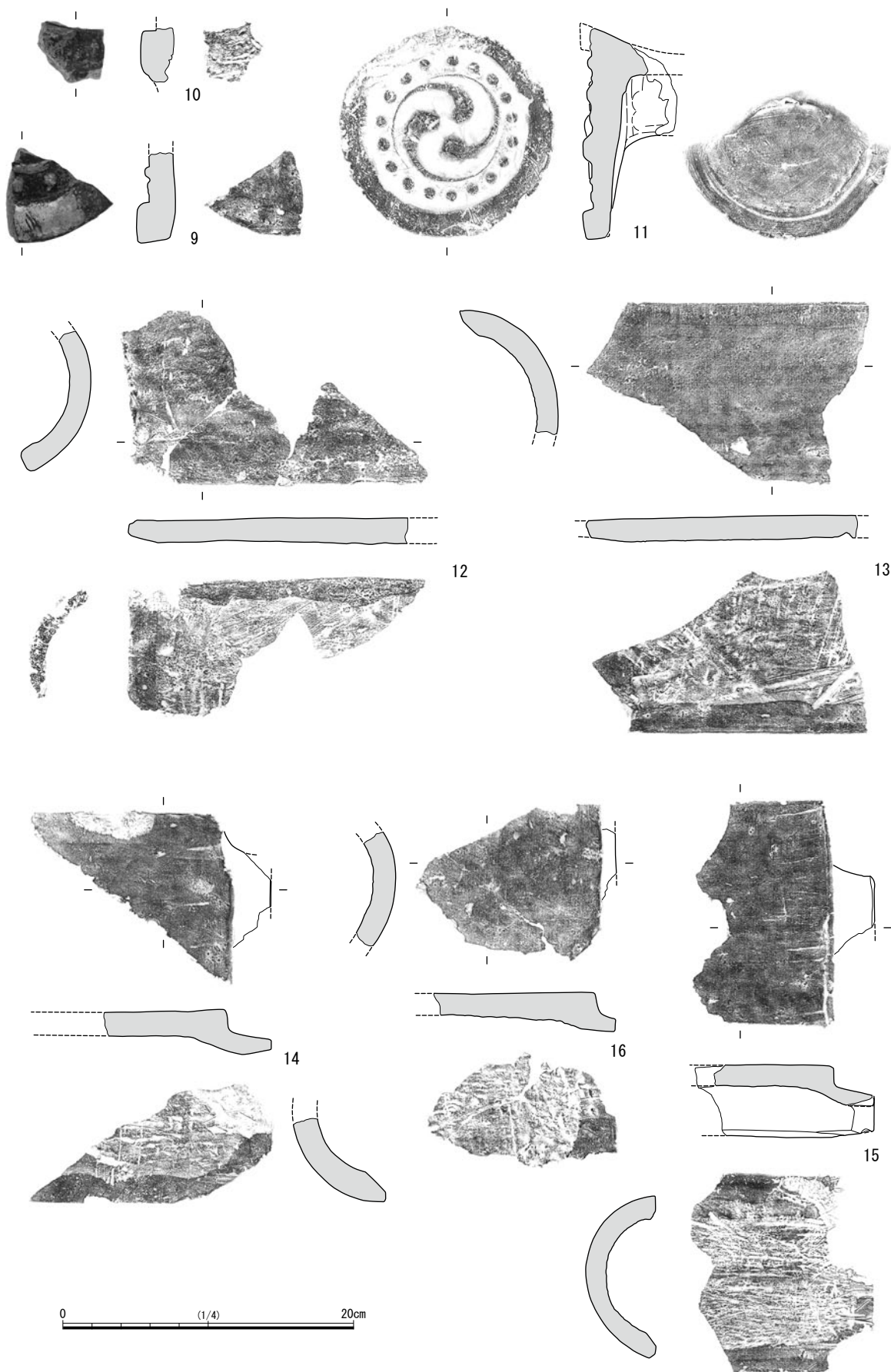
第 17 図 1～5 は土師器皿で、いずれも口縁部に煤の付着があり灯明皿として使用されていたものである。6 は瀬戸の灰釉折縁皿で、口縁部は水平に広がり端部が少し立ち上がる。7・8 は瓦質の鉢の破片で、同一個体かと思われるが接合はできなかった。やや軟質の焼成で、内部が淡灰褐色、表面は暗褐色を呈している。



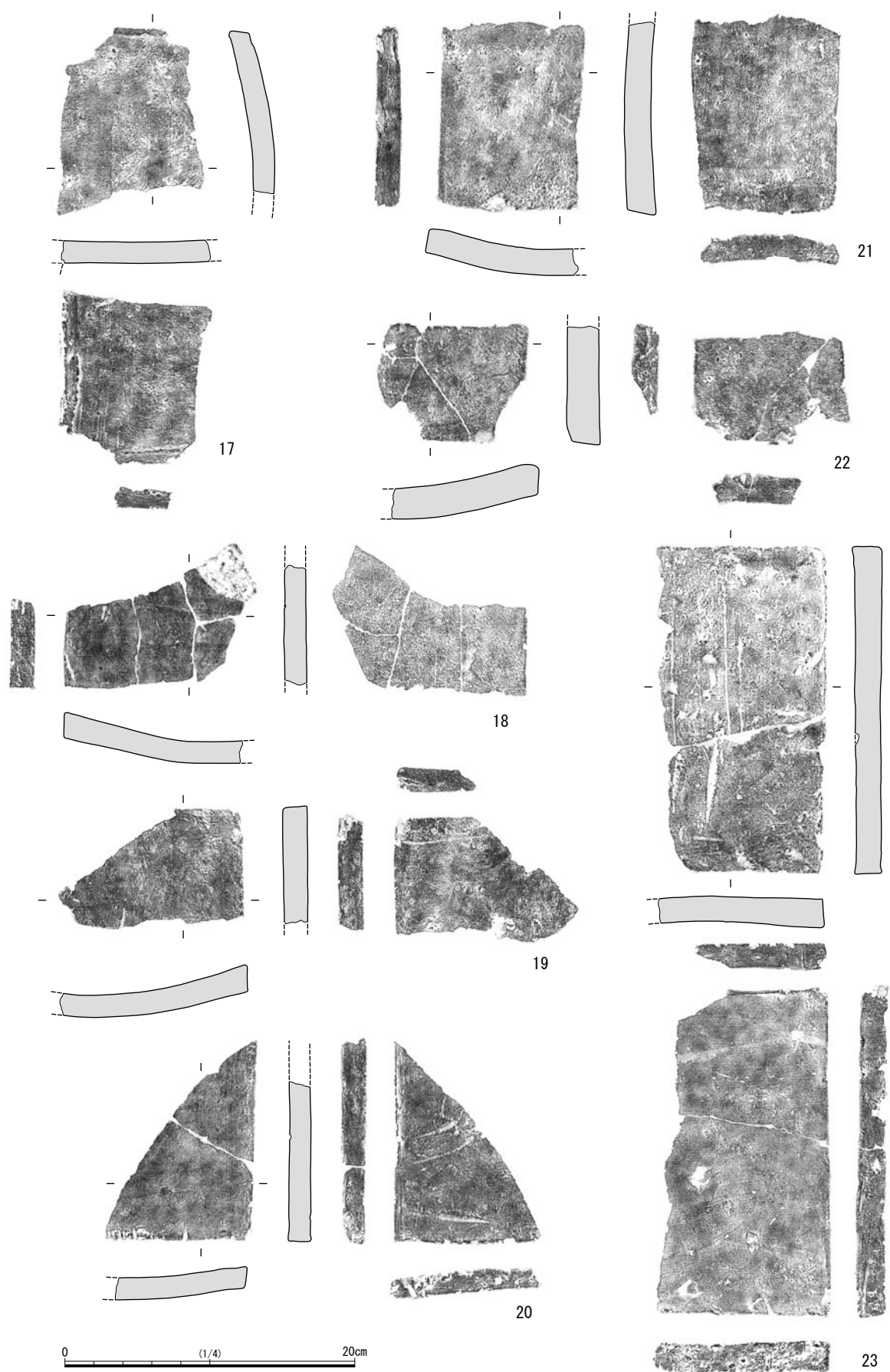
第 17 図 遺構 40 出土遺物実測図 1

第 18・19 図 9～23 は瓦類で、いずれも本瓦葺きの瓦である。遺構 40 からは棧瓦の類は出土していない。9 は金箔を押した軒丸瓦で、瓦当部の 6 分の 1 程度の破片である。周縁・珠文と太い界線状の凸線があるが、これは巴文の尾部とみられ、類例から主文様は三巴文と思われる。周縁と文様の突出した部分だけに赤漆を下地に金箔を押しており、小片ながら金箔の残りが良い資料である。胎土はほとんど砂粒を含まず灰白～灰色の縞状で、焼成は比較的硬質である。10 も金箔を押した瓦片であるが、軒瓦ではなく何らかの飾り瓦の文様の浮彫部分が剥離したもので、剥離面に接合用の刻み目の条線が見える。軒瓦と同様に、赤漆で金箔を押している。灰白色を呈する胎土で焼成はやや軟質である。11 は三巴文の軒丸瓦で、瓦当部がほぼ完存している。瓦当の厚さは一定ではなく、丸瓦接合部分より下端部がやや薄くなっている。瓦当裏面はナデ調整で、とくに裏面周囲を外形に沿って強くナデ調整している。胎土は砂粒を含み灰白色を呈し、表面は灰黒色である。

12～16 は丸瓦である。いずれも胎土は若干の砂を混じえるもので、内部は灰～暗灰色で表面は黒色を呈する。13 の凹面には斜め方向の、14・16 は横方向の鉄線切り痕が見える。また 13・14 には瓦衣の吊り紐痕がある。凸面はいずれもナデ調整である。なお玉縁長は 2.5～3cm のもの



第 18 図 遺構 40 出土遺物実測図 2



第 19 図 遺構 40 出土遺物実測図 3

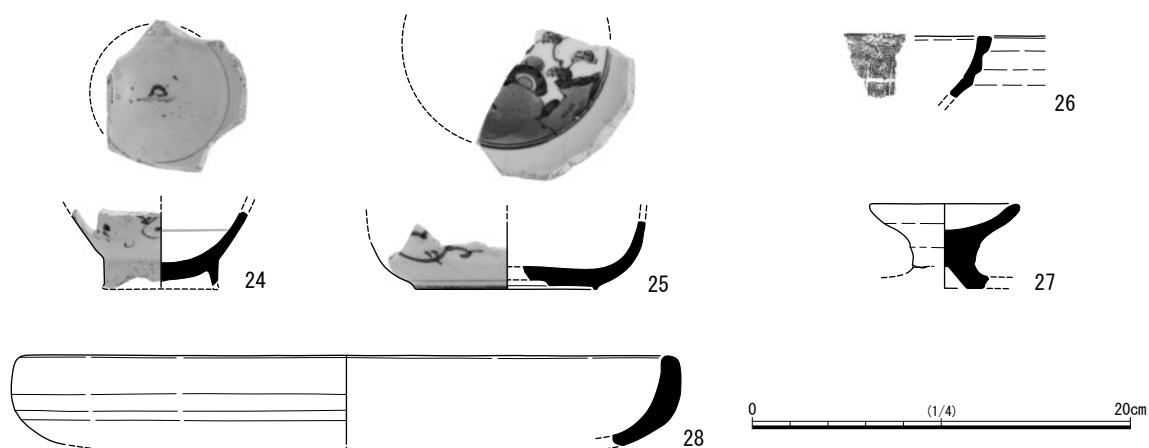
が多いが、16 は 1cm 程度である。

17 は瓦当部分を失う軒平瓦の平瓦部である。破片の端部に瓦当部分接合のための刻み目（カキヤブリ）とナデつけた跡が見える。凹凸両面ともナデ調整されており、横方向の鉄線切り痕も認められる。18 ～ 22 は平瓦である。18 ～ 20 は造瓦技法が共通する平瓦で、凹面にナデ調整を加え滑らかにされている。また部分的に表面に離れ砂らしい細かな砂粒が認められる。21・22 はやや厚手で軟質焼成の平瓦である。21 は全体に灰白色を呈する平瓦で、凹面に斜め方向の鉄線切り痕が認められる。

23 はほとんど反りがない瓦で、各側面が平面とほぼ直角をなすことから、敷瓦のような製品のほぼ半分の破片かと思われる。一方の平面と側面の 2 面はナデ調整されるが、もう一方の平面は仕上げ調整が加えられていない。側面も 1 面は未調整である。

遺構 42・49 出土遺物（図版 14、第 20 図）

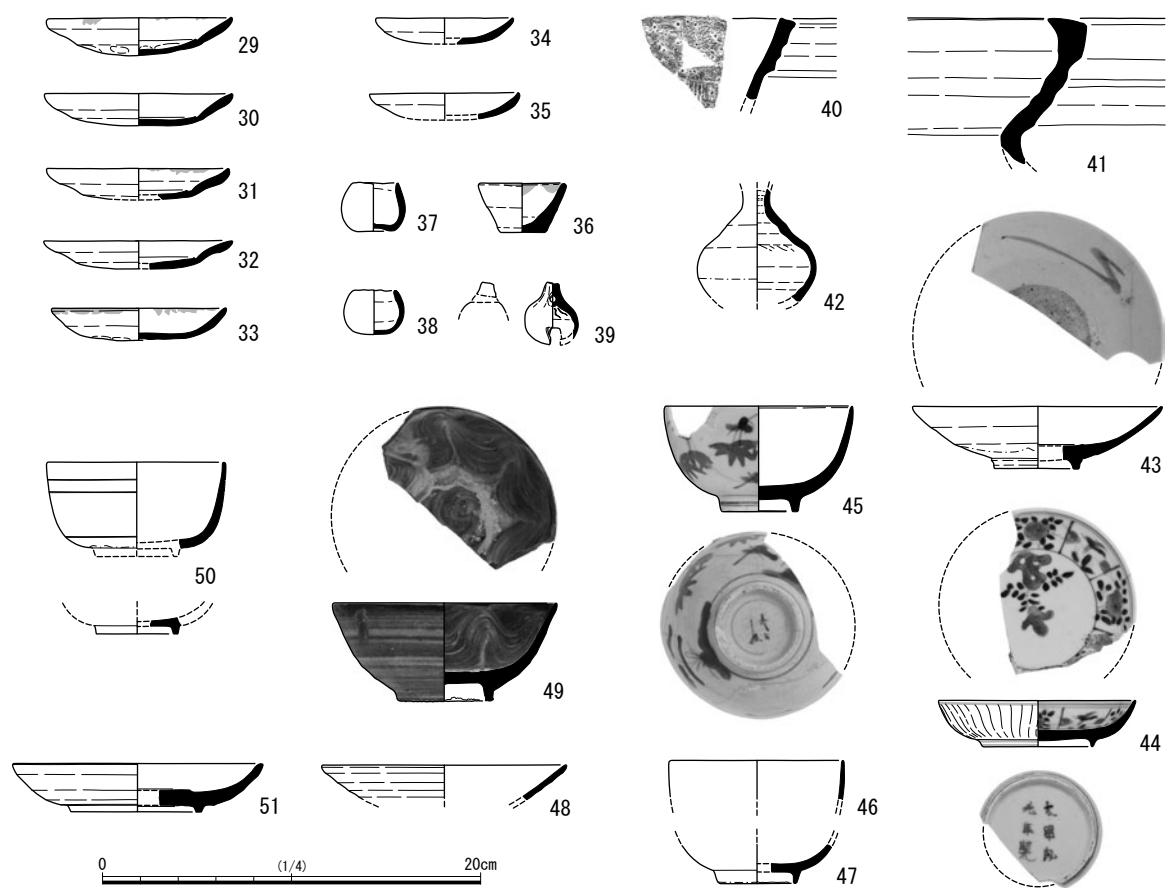
第 20 図 24・25 は染付磁器である。24 は高台の高い、いわゆる広東碗である。25 は内面の側面を青磁釉で色分けした皿である。底面の中心部は窪ませて施釉されているが、低い高台内は蛇の目状に釉を掻き取り露胎とし少し砂目が付く。26 は陶器の鉢で、器壁は薄いが内面に縦方向の刻線があり擂鉢であろう。胎土は砂粒を含み内部は灰白色、表面は褐色を呈する。また内側には黒褐色の釉がまだらに掛かっている。27・28 は素焼きの土製品で、27 は瓦灯内側の灯明皿受け台部分である。28 は焙烙で、底面にわずかに煤が付いている。



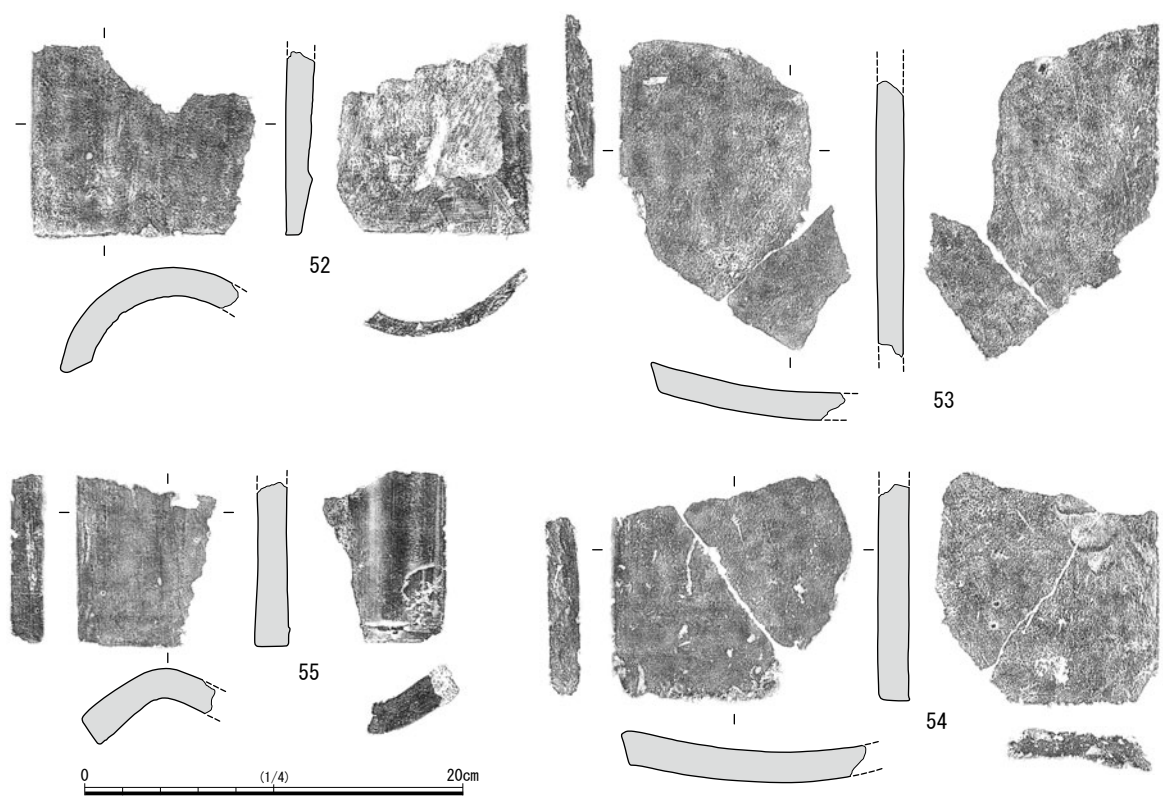
第 20 図 遺構 42、49 出土遺物実測図

遺構 9 出土遺物（図版 14、第 21 ～ 23 図）

第 21 図 29 ～ 35 は土師器の皿である。29 ～ 32 には見込みに沈線が廻る。29 ～ 31・33 の口縁部には灯芯の跡があり、図示しなかった破片の多くにも口縁部には煤の付着しているものがある。いずれも灯明皿として使用されたものと思われる。36 は瓦質焼成の小さな鉢形の土製品である。37 ～ 39 は伏見稲荷大社の縁起物で、37・38 は「つぼつぼ」、39 は土鈴である。40・41 は焼締陶器で、40 は擂鉢、41 は甕である。どちらも胎土に砂粒を含み、41 の表面は茶褐色の化粧土を横方向に引いている。42 は細口の小壺で、上半部だけに茶褐色の化粧土を掛けている。



第 21 図 遺構 9 出土遺物実測図 1



第 22 図 遺構 9 出土遺物実測図 2

43～45は染付磁器である。44の皿の底面には「大明成化年製」の銘があるが、字形は崩れている。45の碗の底面には「大明年製」らしい銘があるが、もはや文様化している。46～48は白磁製品である。46・47は同形の碗と見られるが別個体で、46は釉がわずかに青味を帯びている。48は皿である。釉はやや灰色を帯びている。49は唐津の碗で、内側は波状、外側は横方向に刷毛目を施している。見込みには目跡があり、高台畳付にも砂が付着する。50は淡黄褐色の釉を掛けた碗で、いわゆる京焼伊万里と思われる。図示した鉢部片と底部片は直接には接合しないが、釉調などから同一個体とみられる。51は黄褐色の灰釉を掛けた厚手の皿である。見込みの中央が少し高まり、この部分は露胎になっている。底面の高台内には円弧状の焼台の跡も認められる。

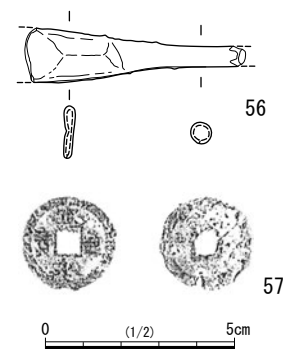
第22図52～54は本瓦葺きの丸瓦(52)と平瓦(53・54)、55は棧瓦である。遺構9からは他に平らな塀瓦の破片も共伴していた。第23図56は銅製の煙管の吸い口、57は銅銭で錆化が進んでいるが、銘は「寛永通宝」と読める。

遺構29出土遺物(図版14、第24図)

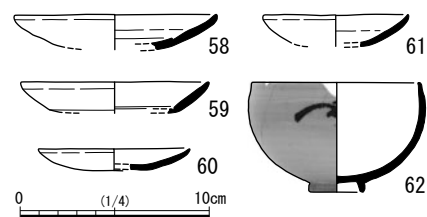
第24図58～61は土師器皿で、58・59は見込みに沈線が回り、どちらも黒味の強い色調を呈する。60・61は淡褐色を呈している。62は京焼の茶碗である。内面から外面の高台際まで淡灰緑色の釉を掛け、外面に鉄釉で描かれた文様の一部が見える。なお、図示しなかったが土坑内上層から信楽と見られる甕胴部の破片が数点出土している。

遺構35出土遺物(図版14、第25図)

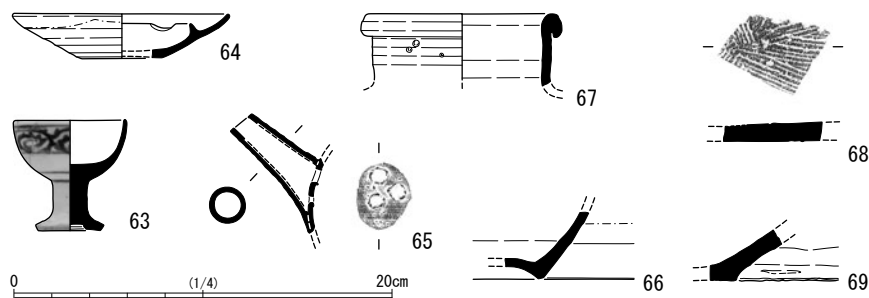
第25図63は伊万里の染付仏飯器である。64は灯明皿の受け皿で、内面から口縁部にかけてだけに乳白色の釉が掛けられている。65・66は土瓶である。ともに外面だけ灰緑色の釉が掛かっているが、別個体である。65は注ぎ口部分で、先端部には釉がなく焼成後に研磨されたように見える。66は底部の破片で、底面から3cmほどは釉がなく、煤が付着している。67はやや広口の壺の首部片で、口縁は外側に丸く折り曲



第23図 遺構9出土遺物
実測図3



第24図 遺構29出土遺物実測図

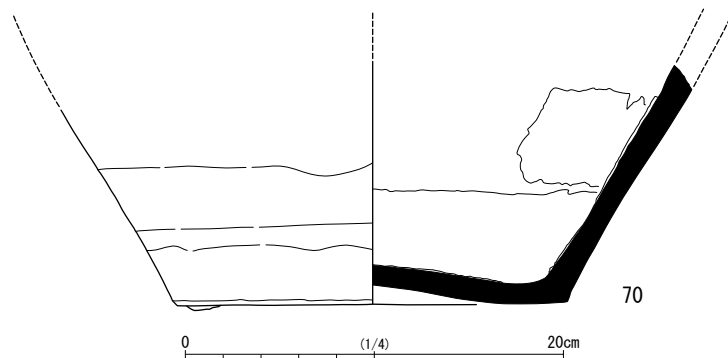


第25図 遺構35出土遺物実測図

げて玉縁状につくる。表面は光沢のある茶褐色を呈する。68は播鉢の底部中心あたりの破片である。播り目は摩滅し、かなり使いこんでいるようである。69は大甕の底部片である。胎土には白色粒の目立つ砂を含む。

遺構6出土遺物（第26図）

第26図70は、中型の甕で胎土などから信楽焼と思われる。おそらく便槽にされていたものであろう。



第26図 遺構6出土遺物実測図

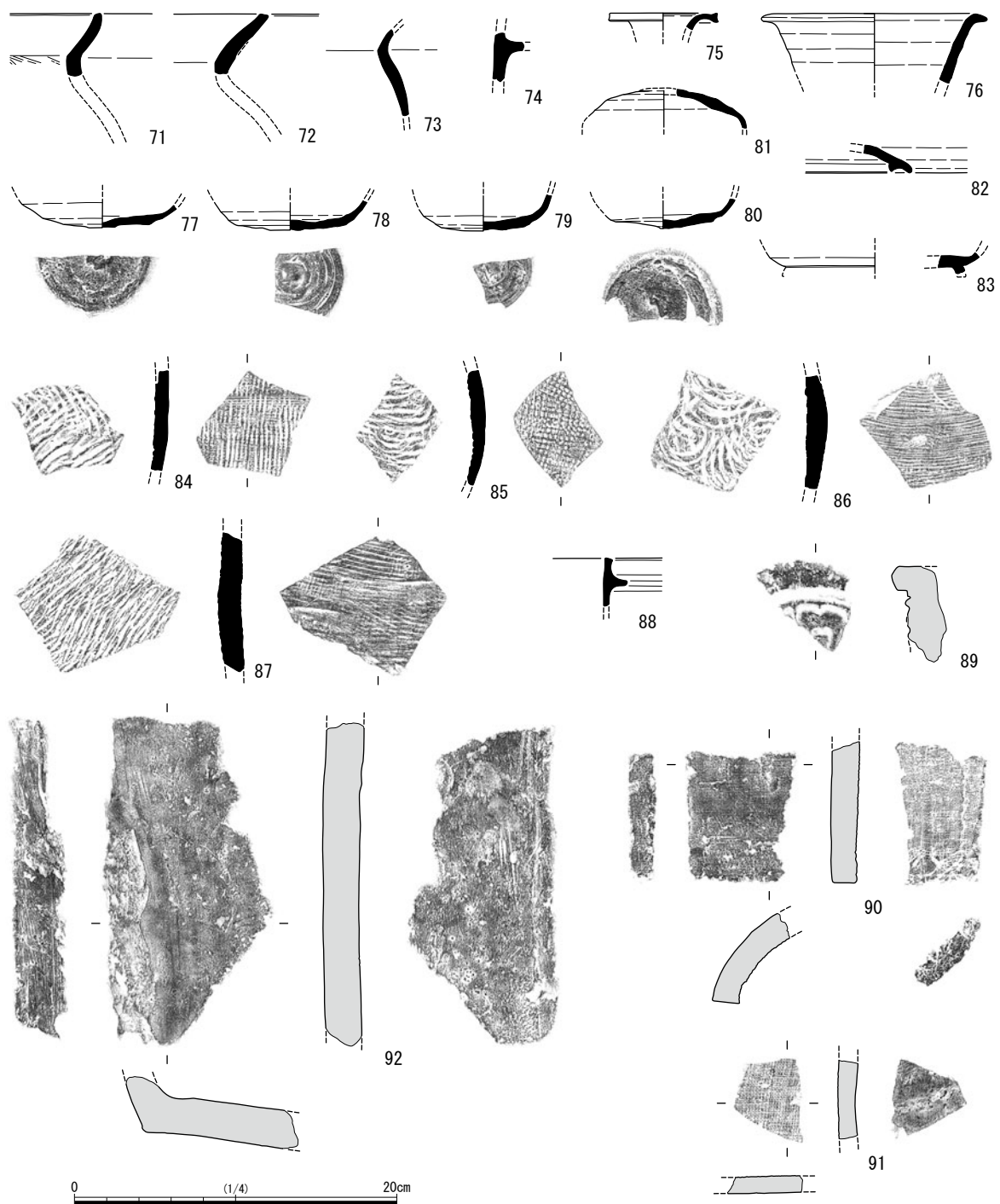
3. その他の出土遺物

ここでは必ずしも遺構に伴わずに出土したものや、遺構埋土に含まれていても明らかにその遺構の年代と掛け離れるような、主に古代の遺物を紹介する。

第27図71～73は土師器の甕で、71・72は口縁部、73は体部から口縁に移行する部分である。いずれも軟質の焼成で表面が摩滅しており、71の内側には微かにハケ目調整が認められる程度で他は調整等が不明瞭である。74は体部につばが付くような形状の小片で、胎土には砂粒を多く含む。色調は内部が黒色で表面は乳白色を呈し、表面に赤褐色粒が目立つ。弥生土器かと思われる。75～87は須恵器である。75は花瓶のような小形壺の口縁部、76はやや広口の壺の口縁部である。77～81は7世紀代の蓋坏で、77～80は坏身、81は体部が丸みをもつため蓋とした。82・83は8～9世紀代と思われる坏の蓋と身である。84～87は甕の胴部破片である。いずれも細片のため全体を想定できないが、器厚や外面の調整などから大きさは各種あるようである。88は室町時代の瓦質羽釜片と思われる。2次的な火をうけたものか、口縁部の表面の一部が赤灰色を呈している。

89は軒丸瓦の破片で、蓮華の花弁がわずかに残り珠文帯はない。胎土には砂を混じえていない。内部は灰白色で表面は灰黒色を呈している。文様やナデ仕上げの造瓦技法から11世紀後半頃のものと思われる。90・91は奈良時代前期の瓦である。どちらも硬質の焼成で黒灰～青灰色を呈している。90は丸瓦で、凹面の布目には側面に沿って布の継ぎ目が、端面近くには布端の糸の乱れた状態が見える。91は薄手の平瓦で、凸面はほぼ平滑にされ叩き目などは認められない。92は、平瓦凹面の側面端に刻み目を入れ粘土を接合して鱗状の突起を作り出している。端部が失われているが瓦当が付くものと思われ、鱗が片側だけに付くならば破風部に用いられる掛瓦になる。平瓦の残存部はほとんど反りを持たないが、鱗の付く面をナデ調整で平滑に仕上げているためこの面が凹面になると見られる。桃山～江戸時代初期に属する瓦であろう。

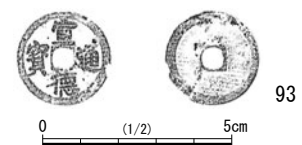
第28図93は中国銭で、明時代の「宣徳通宝」（1433年初鑄）である。状態は比較的良好で



第 27 図 その他の遺構、包含層出土遺物実測図 1

銘は鮮明である。

出土地点・遺構は、72・73・79・82・85・84・88・89 が 1 区の包含層（整地土）、71 が遺構 30、75・80 が遺構 40、74・77・78・81 が遺構 31、78・86 が遺構 36、76・87 が 2 区の現代整地土、83 が遺構 32、91・93 が 1 区の現代整地土、90 が遺構 69、92 が遺構 9 である。



第 28 図 その他の遺構、包含層出土遺物実測図 2

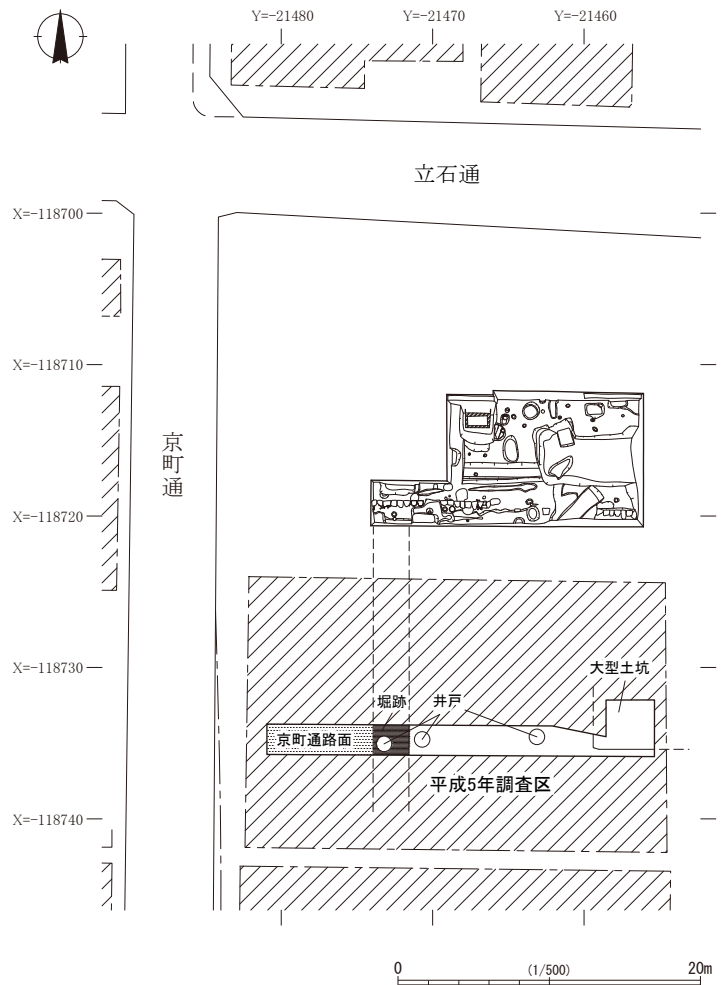
第6章 調査の成果

1. 遺構について

今回の調査の成果として挙げられるのは、まず、当該地の旧地形を把握できたことである。従来の発掘調査例や地表観察例から、伏見城下町は概ね東から西に下がる斜面を雛壇状に造成して町割りが成されていると考えられている。今回の調査地も発掘着手前の状況から東西に段差のあることを想定していたが、調査の結果、北が高く南が低い南北に段差のある造成であることが判明した。調査地の原地形は東から西に緩やかに下がり北から南へも下がり気味だが、調査区南北の中央辺りを境に南側は削平し、高まっている北側にはさらに盛り土をして人工的な段差を造りだしたものと判断された。南東部の削られて平坦にされた部分は地山の黄褐色土が広がり、この面を掘り込んで礎石（遺構 57）や石列（遺構 10）の掘方がつくられていた。この地山面は西に向かって緩く傾斜し、1区と2区の境あたりから西方は暗褐色土の整地層になっていく。なお、北半部の黄褐色土の盛り土整地層中からは遺物は全く出土していないため、この造成が地山を大規模に削ってなされた、伏見城建設の初期段階の工事であった可能性が考えられる。

調査区南端西寄りで検出した落ち込み（遺構 69）へは、ここに東から流れてきた水を誘導するように暗渠状の施設がつくられていた。これはこの落ち込み遺構が単なる土坑ではなく、堀のように水を溜められるか、あるいは水が流れるような構造のものであったことを示唆すると思われる。

今回の調査地の南で従前に行われた試掘調査で検出された溝は、その西側に砂利敷きの路面が伴っていたことから、伏見城下町当初の京町通東側溝と推定された（第29図）。「溝」は幅約2mあり、「堀」といえるほどの規模である。今回の調査開始時点では調査区内の溝の想定位置で続きの検出を期待し



第29図 試掘調査結果と今回の調査区

ていたが、溝は見出せなかった。しかし調査区南端西寄りで検出した落ち込みは、この溝の北への延長の位置に当たることから、「溝（堀）」の北端になる可能性がある。逆に、試掘調査で検出された溝は少なくとも調査地の地点あたりまでは続くとみられ、当初の京町通西端が現状の位置であれば、道幅が現在の 2.5 倍ほどだった可能性が高まった。京町通が、伏見城下で港地区と街区中心部とをつなぎ、また東の武家屋敷街と西の町家街を分けるという、南北に通じる主要道路であったことを示す例になろう。さらに、京町通の側溝が一旦途切れる状況ならば、調査地の北を通り京町通と交差する現在の立石通も、京町通同様に主要道路であった可能性も考えられる。

ただ、落ち込み遺構の北面はもともとの人為掘削時点の状態ではなく、その後に壁面が崩落したような状況で、本来の北端の位置はもう少し南の調査区外になるようである。そのため、溝とみた遺構が、ここで止まるのか、あるいは屈曲するものなのかは判断できなかった。ただし、この溝は落ち込み部分の整地の様子から、江戸時代の初期頃までには埋まり京町通の幅も現状に近い規模に狭められたと思われる。

調査地が含まれる伏見城下の古図は多く知られているが、製作年代の確かめられる図はいずれも 18 世紀後半以降のもので、秀吉築城当初の城下の状態は必ずしも正確に古図には表われていないようである。ただし、①御香宮神社蔵『伏見桃山御殿秀吉公御城并大小御屋鋪之図』（図版 13）や②神戸市立博物館蔵（南波コレクション）『伏見桃山御殿御城之画図』（図版 12）で調査地付近の状況を見ると、京町通沿いの街区の描き方が京町一丁目と二丁目以北で少し異なっているように見える。調査地の場所は①の図によると、京町通の西は通り際まで「山口駿河守」の屋敷地となって京町一丁目は片側町になるが、②では京町一丁目のところは京町通に沿った両側が「町家」の表示になっていて、山口駿河守屋敷は京町通りには面していない。そして一丁目東側の町家部分の奥行きは、二丁目以北の町家部分の奥行きより狭いように表されている。これらがどのような事情を反映して描かれたのかは分からないが、今回の調査知見を考えると、あるいは京町通の構造の変遷を表すものかも知れない。

調査区南端部で検出した東西方向の石列は、調査地近辺の現存例（第 30 図）からみても、町家建物の縁石であろう。面を北に向けるので建物本体は石列の南側で、西側の京町通に間口を開くものと考えられる。石列の設けられた場所は、上記の「落ち込み」が埋没した後になる。この付近の整地層には江戸時代の土坑（遺構 40・35）などが掘り込まれていたが、石列はその上に設置されていることから、遡っても江戸時代後期以降の遺構となる。そして、石列の一部には裏込めに煉瓦片の混入もあり、近代以降に改装されている部



第 30 図 現存町屋の縁石

分もあった。

石列 1・2（遺構 67・68）は、少し石材上面の高さを異にするが北面は揃っており、一連の建物縁石であろう。石列 3（遺構 10）の北面の位置は、1・2 とは少し南にずれるが形状などは同様で、これも一連の町家と思われる。あるいは石列 1・2 が「オモヤ」で、3 が「ハナレ」にあたる建物になるのか。今回の調査地の南での試掘調査では、東西方向に井戸が 3 基検出されている。井戸跡が直線的に並ぶのは、町家内部で表から裏まで土間を通じる「トオリニワ」にあたる部分を思わせる。京・伏見の伝統的な町家で東西方向に長い敷地の建物では、通常トオリニワは建物の南寄りに設けられる。石列 1・2 の位置から試掘坑までの距離は約 16m で、間口 8.5 間程度のやや規模の大きな町家を想定するならば、これらが同じ町家の南と北の端部になることも考えられる。

礎石列（遺構 55・57・58）と単独で検出した礎石（遺構 59）は、石列 3（遺構 10）と石列 2（遺構 68）の直下にある位置もほぼ一致するところから、それぞれの前身建物になる可能性が高い。ただし、礎石配置の全体が分からないため建物の規模は不明である。礎石列の掘方は地山の削平面に掘り込まれているようで、城下でも比較的早い時期の建物になる可能性が考えられる。

2. 遺物について

今回の調査で出土した遺物には、弥生時代～平安時代後期に至る古代の遺物から江戸時代のものであるが、遺構に伴うような遺物はいずれも江戸時代のものであった。金箔瓦が出土しているものの、桃山時代に属すると見られる遺物はごく少なかった。

弥生時代の遺物は土器が数点出土しているが、いずれも細片で摩滅していた。古墳時代に属する遺物には土師器の甕片があるが、これも小片で全体を復元できるものはなかった。須恵器には、7 世紀前半の蓋坏や 8～9 世紀代と見られる壺・坏・甕などがある。これらの古代の遺物はほとんどが調査区西端部の灰褐色土中、またはその場所に掘られた江戸時代～現代の土坑や盛り土中から出土している。今回の調査地は、弥生時代から室町時代にかけての複合遺跡とされる桃陵遺跡の想定範囲に含まれている。この調査地で出土した古代の遺物は、まさに桃陵遺跡の時代幅に一致するものであるが、これらの遺物が主に含まれていた灰褐色土中でも各時期のものが混在している状況であった。この灰褐色土は、先述のように整地のために運ばれてきた客土と考えられるもので、今回出土した遺物がこの調査地内での営みを直接に表すものではない。しかし、整地のための土があまりに遠方から運ばれたとも考えにくいので、これらの遺物はこの桃陵遺跡の一端を表す資料になろう。なお、桃陵遺跡の従来調査でも古代の瓦類は出土しているが、今回の調査でもわずかながら奈良時代前期の丸瓦・平瓦や平安時代の軒丸瓦が出土している。調査地周辺で古代の瓦が出土する遺跡は御香宮廃寺と板橋廃寺が知られているが（第 2 図）、今のところ両者から同種の瓦は見当たらず、距離的にも離れているため直接の関係はないと思われる。平安時代の瓦は、今回の調査地近辺の既調査地点でも若干は出土しているようで、「伏見山荘」など平安時代の遺跡との関連を検討する必要があるであろう。

江戸時代の遺物で多いものは瓦類であった。特に遺構 40 と遺構 9 の土坑は、瓦類の割合が高い。ただし、量的には必ずしも多いものではないため、どのように使用されていたかは明らかでない。瓦類では遺構 40 から金箔瓦が出土しているのが注目される。この遺構から出土した平瓦の中には桃山～江戸時代前期と見られる例（第 19 図 21・22）も混じるが、他の大半の瓦類は少し時期が降るもので、これらは土坑埋め戻しの際の混入品かと思われる。この遺構からは棧瓦が出土しておらず、共伴遺物からも 18 世紀前半までの時期と考える。礎石列の南側で検出した遺構 49 からは瓦灯や伊万里染付の広東碗なども出土しており、18 世紀代の遺構と考えられる。遺構 9 から出土した瓦類には棧瓦や塀瓦が含まれている。共伴遺物から、この遺構は 18 世紀から 19 世紀にかかる江戸時代後期のものと思われる。このように出土遺物から見て今回の調査地は、かなり断片的ながらも江戸時代を通して生活の場であったことが窺える。

【追記】

なお、株式会社ラプラス・システム本社の新社屋（木造 4 階建オフィスビル）は 2016 年 12 月に完成したが、その 1 階ショールームスペースの一画には埋蔵文化財の展示コーナーが設けられた。伏見の歴史を紹介するパネル、この調査で出土した瓦や土器、陶磁器類などが展示されている。また同社のホームページ（<http://www.lapsys.co.jp/>）でも埋蔵文化財調査の状況などが紹介されており、社をあげての取り組みに、埋蔵文化財調査担当者としても感謝します。

引用・参考文献

【全 般】

- * 京都市編『京都の歴史』1 平安の新京（学藝書林、1970年10月10日）
- * 京都市編『京都の歴史』2 中世の明暗（学藝書林、1971年5月31日）
- * 京都市編『京都の歴史』3 近世の胎動（学藝書林、1968年10月10日）
- * 京都市編『京都の歴史』4 桃山の開花（学藝書林、1969年10月10日）
- * 京都市編『京都の歴史』5 近世の展開（学藝書林、1972年4月20日）
- * 京都市編『京都の歴史』6 伝統の定着（学藝書林、1973年3月31日）
- * 横井 清『看聞御記「王者」と「衆庶」のはざまにて』（『日記・記録による日本歴史叢書』古代・中世編16、そしえて、1979年12月25日）
- * 本中 真「寝殿造住宅庭園における眺望行為」（『造園雑誌』47-2、1983年10月31日）
- * 京都市編『史料 京都の歴史』第16巻 伏見区（平凡社、1991年1月10日）
- * 本中 真「橘俊綱の名園選考基準（「地形」と「眺望」）について」（『造園雑誌』55-1、1991年8月9日）
- * 山城食糧株式会社社史編集委員会編『日本の食文化を支えて ―山城食糧株式会社の歩み―』（山城食糧株式会社、1994年7月25日）
- * 田口稚子「橘俊綱造立の即成院木造聖衆来迎像」（『跡見学園女子大学美学・美術史学科報』24所収、1996年）
- * 日本史研究会編『豊臣秀吉と京都 ―聚楽第・御土居と伏見城―』（文理閣、2001年12月10日）
- * 聖母女学院短期大学伏見学研究会編『伏見の歴史と文化』（『京・伏見学叢書』第1巻、清文堂、2003年4月30日）
- * 星野猷二・三木善則『器瓦録想 其の二 伏見城』（伏見城研究会、2006年2月20日）
- * 京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館編『京都 秀吉の時代 ～つちの中から～』（ユニプラン、2010年10月1日）
- * 堀内明博他編『伏見の古絵図』（伏見城研究会、2011年10月29日）

【発掘調査報告】

- * 鈴木重治編『伏見城豊後橋北詰の調査』（伏見城研究会、1975年10月1日）
- * 京都市住宅局・伏見城研究会編『伏見奉行所発掘調査報告 ―桃陵団地立て替え工事に伴う埋蔵文化財調査―』（京都市住宅局・伏見城研究会、1990年6月）
- * 柴 暁彦「伏見城跡発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第44冊1991所収、京都府埋蔵文化財調査研究センター、1991年3月25日）
- * 小森俊寛・原山充志「54 伏見城跡3」（京都市埋蔵文化財研究所編『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』所収、1993年3月31日）
- * 発掘調査団編『黄金塚2号墳の研究』（『花大研究報告』10、花園大学文学部考古学研究室、1997年3月）
- * 京都市住宅局・伏見城研究会編『伏見奉行所発掘調査報告Ⅱ ―桃陵団地立て替え工事に伴う埋蔵文化財調査―』（1997年3月31日）
- * 京都市埋蔵文化財研究所編「伏見城跡(98FD394)」（『京都市内遺跡立会調査概報 平成11年度』所収、京都市文化市民局、2000年3月31日）
- * 京都市埋蔵文化財研究所編『伏見城跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2002-11』、2002年10月31日）
- * 京都市埋蔵文化財研究所編『伏見城跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2004-18』、2005年5月31日）
- * 京都市埋蔵文化財研究所編『伏見城跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006-27』、2007年3月31日）
- * 京都市埋蔵文化財研究所編『伏見城跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2007-10』、2008年1月31日）
- * 西近畿文化財調査研究所編『伏見城跡・桃陵遺跡発掘調査報告書 公務員宿舍伏見住宅（仮称）整備事業』（西近畿文化財調査研究所、2010年3月20日）
- * 京都市埋蔵文化財研究所編『伏見城跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2012-17』、2013年3月31日）

- * 有限会社京都平安文化財編『伏見城・桃陵遺跡』（『京都平安文化財発掘調査報告第2集』、2014年4月31日）
- * 株式会社イビソク関西支店編『伏見城跡 ―集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―』（『イビソク京都市内遺跡調査報告』第9輯、2014年11月28日）
- * 京都市埋蔵文化財研究所編『伏見城跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2014-8』、2015年3月31日）
- * 京都市埋蔵文化財研究所編『伏見城跡・桃陵遺跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2015-2』、2015年9月30日）
- * 京都市埋蔵文化財研究所編『伏見城跡・桃山古墳群』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2015-10』、2016年1月29日）

図 版



1. 調査地遠景（北西より調査地を望む）



2. 調査地周辺（調査地より北西を望む）



1. 調査前全景（北東より）



2. 調査地内の段差（北より）



1. 第1面 西寄りの状況（南より）



2. 第1面 東寄りの状況（南より）



1. 第1面 遺構全景（東より）



2. 第1面 西端部の状況（西より）



1. 石列 1 西端部（北より）



2. 同石材撤去後



3. 石列 3（西より）



4. 同石材撤去後（南より）



5. 遺構 28（東より）



6. 遺構 6（東より）



7. 遺構 16（北西より）



8. 石列 1 下層の状況（南より）



1. 第2面 遺構全景（南より）



2. 第2面 西端部（南より）



1. 石列 3 石材撤去後の状況（南より）



2. 遺構 41 礎石抜跡（北より）



3. 遺構 55 礎石（南より）



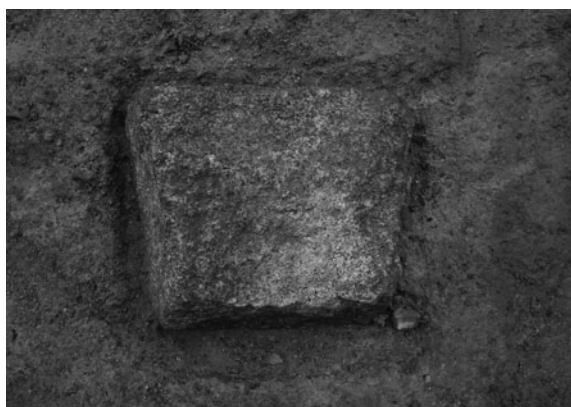
4. 同礎石撤去後（南より）



5. 遺構 58 礎石（南より）



6. 同礎石撤去後（南より）



7. 遺構 57 礎石（南より）



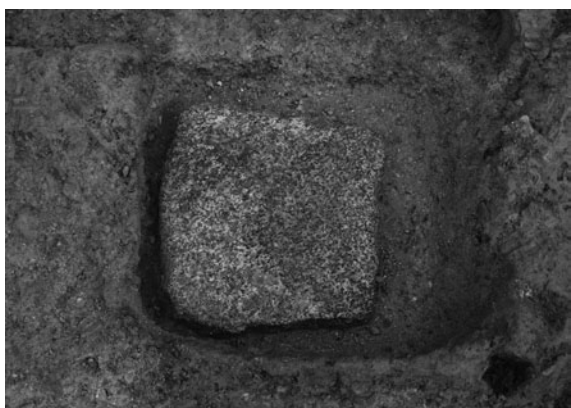
8. 同礎石撤去後（南より）



1. 石列 2 石材撤去後の状況（南より）



2. 遺構 58 礎石と南端拡張部



3. 遺構 59 礎石（北より）



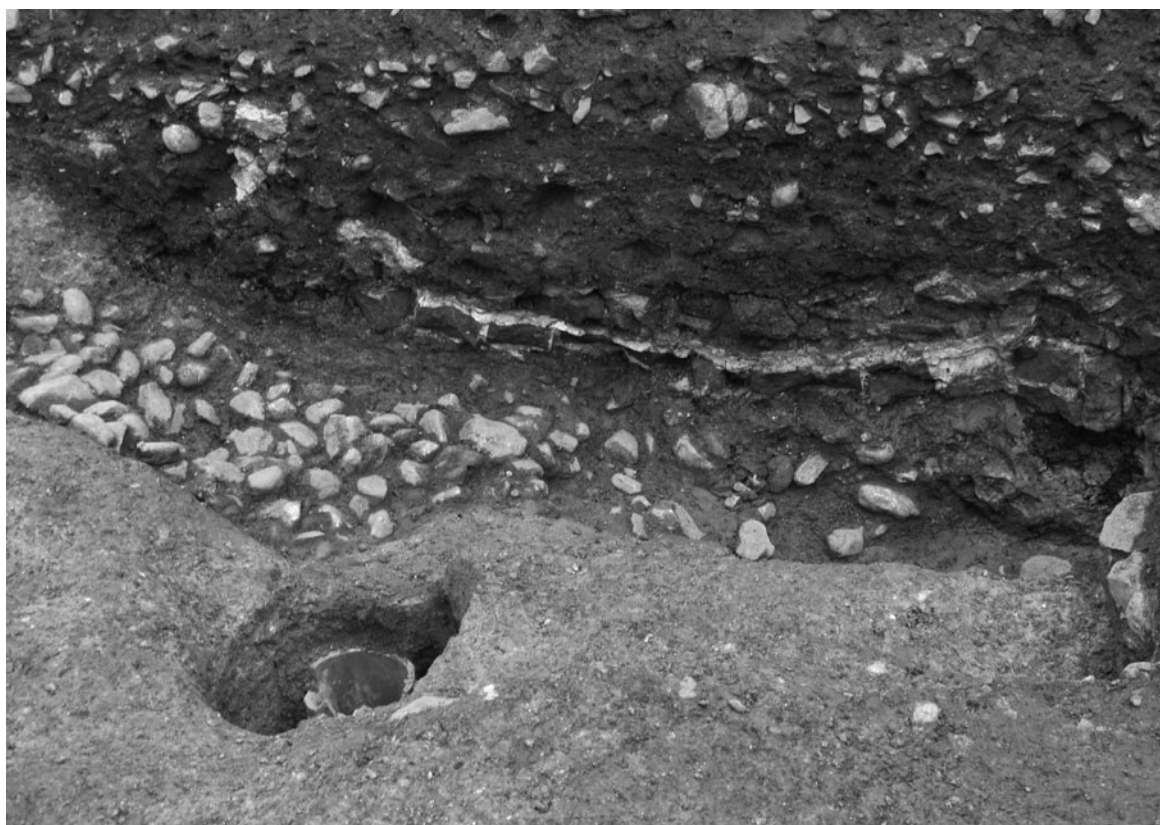
4. 同礎石撤去後（北より）



5. 完掘状況全景（南より）



1. 遺構 16 暗渠状遺構東端部（北より）



2. 遺構 16 暗渠状遺構（北西より）



1. 遺構 16 暗渠状遺構礫撤去後（南より）



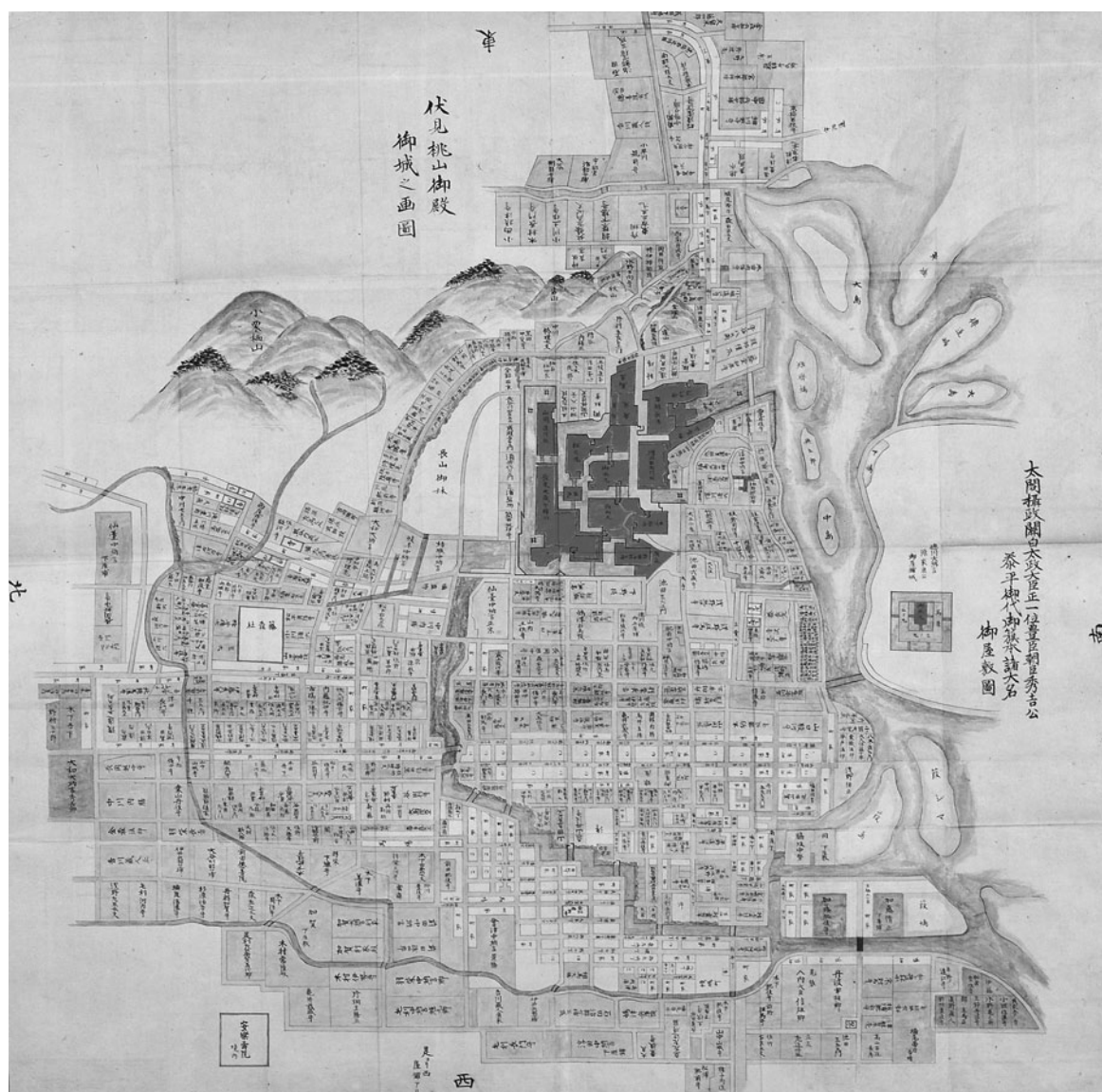
2. 同（東より）



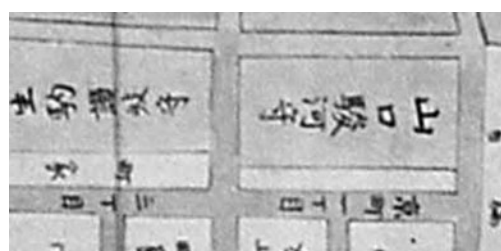
1. 遺構 69 落ち込み (南より)



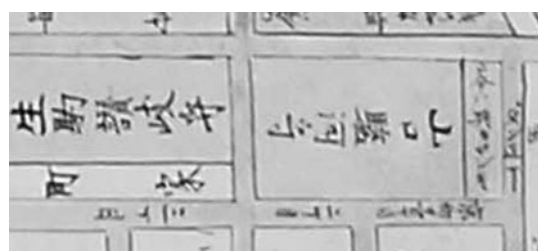
2. 同 (東より)



伏見桃山御殿御城之画図（神戸市立博物館蔵 Photo : Kobe City Museum / DNPartcom）

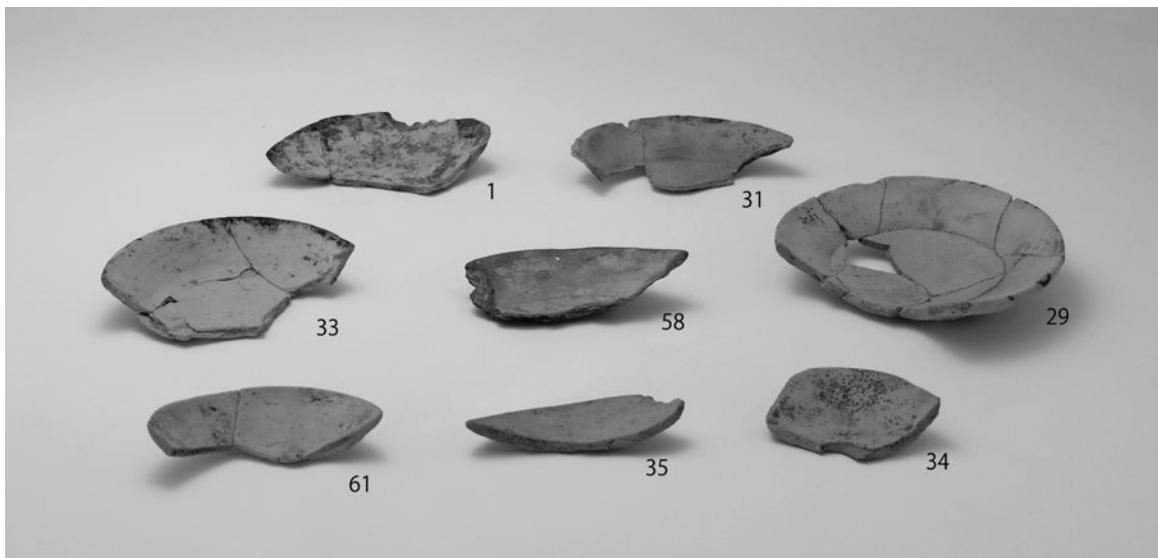


（部分）

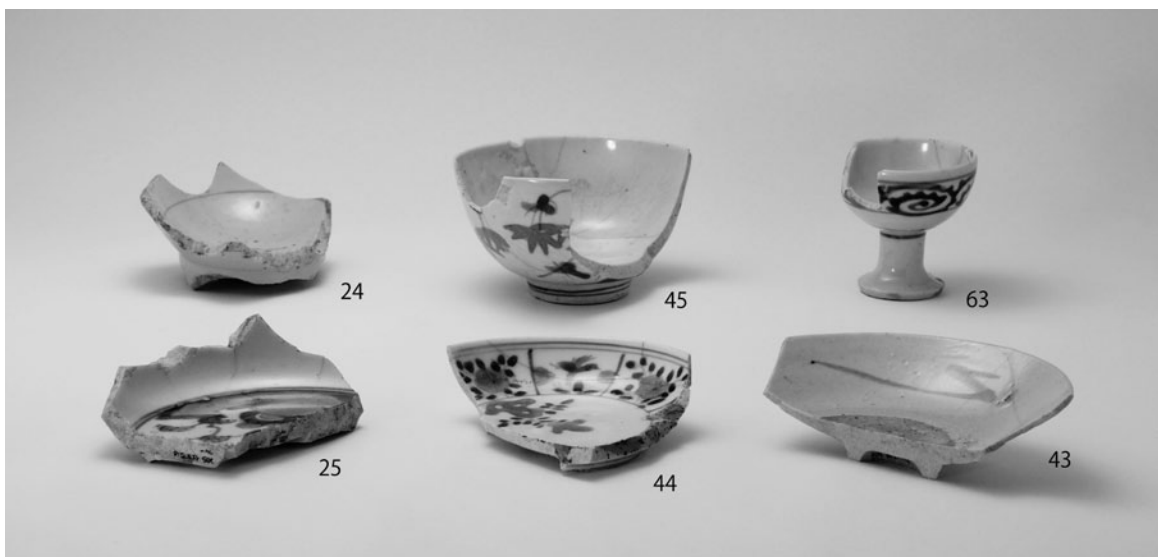


(部分)

伏見桃山御殿秀吉公御城并大小御屋鋪之図
(御香宮神社蔵)



1. 土師器皿



2. 染付磁器



3. 陶磁類

報告書抄録

ふりがな	ふしみじょうあと・とうりょういせき							
書名	伏見城跡・桃陵遺跡							
副書名	—京町1丁目—							
巻次								
シリーズ名	京都平安文化財発掘調査報告							
シリーズ番号	第3集							
編著者名	植山 茂							
編集機関	有限会社 京都平安文化財							
所在地	〒612-8018 京都府京都市伏見区桃山町丹後 20-4							
発行年月日	2017年12月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ふしみじょうあと 伏見城跡・ とうりょういせき 桃陵遺跡	きょうとしふしみく 京都市伏見区 きょうまち ちょうめ 京町1丁目245	26109	1172 1181	34度 55分 47秒	135度 45分 54秒	2015年 11月2日 ～ 2015年 12月18日	138㎡	事業所社屋 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
桃陵遺跡		古墳時代 ～ 平安時代	なし	土師器、須恵器、瓦		包含層等出土		
伏見城跡	城跡	桃山時代 ～ 江戸時代 初期	整地層 礎石列 落ち込み遺構	金箔瓦		京町通東溝端か		
		江戸時代	石列 土坑	陶磁器、土器、土製品、瓦				

平成 29 年（2017 年）12 月 25 日発行

伏見城跡・桃陵遺跡
—京町 1 丁目—
（京都平安文化財調査報告 第 3 集）

編集 有限会社京都平安文化財
〒 612-8018 京都市伏見区桃山町丹後 20 番地 4
電話 075—644—6600

印刷 あおぞら印刷株式会社
〒 604-8431 京都市中京区西ノ京原町 15
電話 075—813—3350